

英語教科書の1世紀(2)

——戦後民主主義と英語教科書——

中 村 敬

1. 言説の変容と継承

筆者のみるところ、戦後50年の中で、英語をめぐる言説が内外共に変容しはじめるのは、1970年代に入ってからである。日本において、その先鞭をつけたのが、小田実「英語、そして、ことばについて」(『状況から』岩波書店、1974、所収)である。小田は、その論文の中で、日本の英語教育を、①「植民地教育」、②「天才教育」、③「金持ち教育」と規定した。おそらく、戦後に限って言えば、日本の英語教育を「植民地教育」と規定したのは小田がはじめてであったろう。小田の論点は明快である。「ネイティヴ・スピーカー」を絶対視し、「ネイティヴ」の奴隷を創り出してしている英語教育を「植民地教育」と規定したのである。

この小田の「植民地教育」論が出る僅か4年前に、原沢正喜は、「文明の先覚としての英語教師」(『英語教育』大修館、1970年2月号)を発表している。原沢は英語教師であり英語学者である。そのエッセーのタイトルそのものが語る原沢の言説は、大半の真面目で良心的英語教師の思いを代弁していた。その意味では、原沢の言説は、極めて伝統的なものであったと思われる。そして、それは今日まで形を変えて引き継がれている。例えば、石黒マリーローズの『「聖書」名表現の常識』(講談社新書、2001)である。石黒は、この本をめぐる、「私は学生たちに国際化の起点として、日常生活の中に現れる聖書の表現、現代の西欧に生きるキリスト教文化をレクチャーしています」¹⁾と述べている。国際化の起点が聖書の表現の理解にあるとする言説は、原沢の言説とも奇妙に一致する。文明化や国際化(Whatever it means!)が、ほとんどなんのためらいもなく英語と結びついているところは、ほぼ150年間少しも変わってはいない。

こうしたゆるぎない言説伝統の中に、小田の言説を置いてみると、その言説の〈異端性〉と〈新鮮さ〉がきわだってみえる。そうした言説を生み出したのは、氏が予備校（代々木ゼミ）の英語教師として英語教育の実態に接していたことと、その実態を作家というポジション、つまり英語問題を外部から文明論として展開できる立場にあったからである。こうした視点が自称英語教師のプロたちにしばしば欠けていると思われるのは、彼等が政治的に無意識だからである。彼等の政治的無意識は、一つには、意図的に政治を切り離れた「応用言語学」を、英語教育の理論的よりどころにしてきたからであり、もう一つは、ここ百年の日本の国際関係が、基本的にアングロ・サクソン（戦前はイギリス、戦後50年はアメリカ）との二国間関係であったことと深い関わりがある²⁾。

こうした二国間関係から生まれるメンタリティーは、アングロ・サクソン文化への過剰な入れ込みであり、その結果、前述の石黒マリーローズのように、「国際化の起点」を英語の理解に置いて恬淡としていられるのである。彼等は、アングロ・サクソンと彼等の言語への過剰な入れ込みと、近隣諸民族と諸言語への日本人の冷い眼差しが表裏の関係にあることに気がついていない。それを政治的無意識と呼ぶのである。

この政治的無意識の系譜には二つある。一つは、英語が日本の近代化を担う役割を了えた明治30年頃に、英語それ自体を研究の対象とするところから生まれた英文学研究であり、もう一つは、英文法（後の英語学）研究である。英語が日本の研究者の身体から離れて一個の抽象物となったのはこの時期である。実際、井上能孝『箱館英学事始め』³⁾や小林亥一『文久三年御蔵島英語単語帳』⁴⁾などに詳述されている英語学習の環境では、身体で英語を覚えるしか方法がなかったのである。身体で覚えた英語は具体性を持った言語であって単なる抽象物ではない。具体的なものなら、それを身につけるのに必ずしも一級の知力を必要としない。『文久三年御蔵島英語単語帳』の原資料の作成者は、外国語をそれまで聞いたことも読む機会もなかった一介の村役場の吏員だった。彼は、難破して御蔵島に滞在することになったアメリカ人から聞いた英語を、片仮名で記しておいて、後に学んだそれに相当する英語を併記して冊子にしたのである。彼にとって、英語は何よりもまず生活用語そのものであって、抽象的なモノではなかったはずだ。

明治30年以降に英語が抽象的となったのは、幸いでもあり不幸でもあ

った。幸いだったのは、母語を通して英語を学ぶことが当り前になることによって、英語とその背後にある文化を対象化することができたことである。アングロ・サクソンの旧植民地の多くの人たちは、自らの言語を西洋の大言語と対抗できるように育て上げる前に西洋の大言語を生活語として受け入れなければならなかった。幸い日本は英語に対抗する言語を持っていたために、また地政学的にも有利な立場に位置していたため、アングロ・サクソンの直接支配を（戦後のアメリカの占領期を除いて）受けずに済んだ。その間に日本の英語・英文学研究は、独自の発達を遂げた。その独自性は、母語である日本語に置き換える翻訳英語・英文学研究であり解釈英語・英文学研究である。そうした研究は、主として日本人のためのものであって、国境を越えての交流はほとんどなかった。英文法の研究も例外ではない。細江逸記『英文法汎論』（1917）は、それが英語で書かれていれば世界的名著の一つになっていたであろうと言われるほどの独自性を持ったものであるが、日本語で書かれていたために、日本人にしか読めなかった。明治30年以降この国の英文学と英語学の研究はあくまでも自閉的であり、その伝統は今日まで生き延びている。

さて、英語が抽象的な研究対象となったことによってもたらされた不幸は、一定のレベルの英語力を身につけようと思えば一定の知力を必要とする状況から生じた英語の権威化と神格化である。つまり、英語エリートの誕生である。英語エリートは、今日では同時通訳のような「英語の達人」も入るが、伝統的には、英文学や英語学研究のテクノクラートである。こうした英語エリートの地位は、英語が生活語になっていない日本にあっては、まったく安泰である。それどころか、彼等の威光はますますひかり輝く。しかし、テクノクラートこそ実は問題なのである。『原発事故はなぜくりかえすのか』⁵⁾の著者は、繰り返される原発の事故を、科学者の社会性の欠如にあるとした。言い換えれば、彼等の学問が自閉的だということだ。自閉的な学問は、それに従事する人間をますます政治的に無意識にする。

日本の英語教育にとって不幸なことは、政治的無意識のリーダーたちに先導役を任せたことだった。そのリーダーたちの多くは、米国直輸入の応用言語学の旗手で、その理論的根拠を現代言語学に求めたことだった。現代言語学の不幸は、人間の営みともっとも深い関係にあることばの本質に迫ろうとして、言語理論の精密化を追求すればするほど、こと

ばが、人間の営みから切り離されてしまうという逆説にある⁶⁾。こうした不幸は英語教育にも持ち込まれた。戦後フルブライトやガリオアの留学生としてアメリカに留学した無数の英語教師や英語学者が帰国して、日本の英語教育界に大きな影響を与えはじめるのは50年代の中葉からであるが、政治や経済から切断された彼等の言語教育思想は今日までしぶとく引き継がれている。

しぶとく生き抜いてこられた理由は、応用言語学が英語教育の理論に擬似科学としての装いを与えたからである。英語教育を自律的な科学にするためには、言語教育を他の学問分野と対等に勝負できる科学に育て上げてしまう必要が、担当者の側にあったからである。英語教育学という名称が盛んに使われるようになったのも70年代以降である。英語教育学はそれを担当する「専門家」を必要とする。70年代以降、英語教育学で修士号を取得することも可能になった。こうして、英文学研究のテクノクラートではなく、英語研究や英語教育のテクノクラートを育てる道筋がつけられた。しかし、90年代になるとこうした新しいテクノクラートを厳しく批判する人物が登場する。J.ハニーをして「カルト」と言わせた⁷⁾ R.フィリップソンの『言語帝国主義』⁸⁾である。彼は、応用言語学に依拠する英語教育のプロフェッショナルリズムこそ、英語教育を政治・経済・社会（文化）の問題から切り離している元凶だと批判するのである。小田実が「植民地教育」を厳しく批判してから実に20年後のことである。90年代以後、A.ベニクックやM.ホルボロー⁹⁾など英語の母語者が、英語問題に鋭い論評を発表してきている。

日本では、1974年の小田の批判的言説と同じスタンスで書かれた「イデオロギーとしての英会話」¹⁰⁾が1975年に『展望』に載った。1978年には、金井和正の『英語教育解体』が出た。三者に共通するのは、英語教育のプロフェッショナルリズムが不可視の状態にしてきた英語と政治・経済・文化・歴史の深い関わりを明らかにしようとした点である。対抗言説としてのこの流れは、1989年の拙著『英語はどんな言語か』¹¹⁾以降、津田幸男『英語支配の構造』(1990)、大石俊一『「英語」イデオロギーを問う』(1990)が世に出ると共に、小田が戦後はじめて使った「植民地教育」ということばや、「言語侵略」「英語帝国主義」が当り前のように使われるようになった。そのような中であって、『言語帝国主義とは何か』¹²⁾が世に出た。それと同じ時期にイ・ヨンスクの『「国語」とい

う思想』や安田敏明『植民地のなかの「国語学」』¹³⁾ など、日本語と近隣諸言語との社会政治的関係を明らかにする論考も出揃った。今日の時点で求められるのは、西洋大言語と日本語、日本語と近隣諸言語の関係を三極構造¹⁴⁾ として同時並行的に読み解くことであるが、この点は本論文の主目的ではないので、ここでは立ち入らない。

さて、前述した通り、小田が「植民地教育」ということばを使った70年代を分岐点として、英語をめぐる言説に変化が見え始めた。その変化は後に詳述する英語教科書に現われた。さらにまた、清水義範の『永遠のジャック&ベティ』（講談社、1988）をはじめとして、最近（2001年8月現在）では伊藤比呂美「スリー・りろ・ジャパニーズ」¹⁵⁾ のようなフィクションにも、日本人の英語観の変化を示すセリフや場面が登場する。学習塾を経営する「夫」は、2人の外国人を「英会話の講師」として雇う。その中の1人（スタンレー）は、香港からやって来た留学生で、「英語はべらべらだったが、すごく聞きづらかった。」夫は「英語と文化」と称して、香港に関連したことを集中的に教えた。そんなことをやっていて子供が高校の受験に通るのか、と保護者から苦情が出た。それにスタンレーの英語が標準的でないとも言われた。そこで夫は激高して次のように言った、と作者は書いている――。

「標準的とはなにごとかとおれは思ったぞ。おれたち日本人は、日本人の英語を発見する。香港人は香港人の英語をしゃべる。フィリピン人はフィリピン人の、フランス人はフランス人の、アメリカ人はアメリカ人の英語をしゃべる。標準なんかあってたまるか。」

こうした英語観は、70年代以前には決して登場することのなかったものである。それは、1954年に発表された小島信夫の「アメリカン・スクール」に描かれた英語観とはまったく違う。その英語観は、支配者であるマッカーサー（つまり、アメリカ、そして英語）に対して無条件にこうべをたれている英語教師の自信喪失のそれである。それから半世紀、「標準なんかあってたまるか」と、たとえ虚勢であったとしても啖呵をきることができる人間が登場したことは、実に興味深い。何故か？ この夫の言語観を日本で実践しようとする、市場原理が支配する日本の「英語社会」では、結局異端か敗者にならざるを得ないからであり、そ

うした状況の中での自己のポジションを突きつめていくと、漱石のように「宙吊り」にならざるを得ないからである。啖阿だけでは何も解決しないのである。主人公は、標準語なんか無いと言いつつアメリカ大好きで、主人公一家は最後にアメリカへの「亡命」という道を選ぶ。

こうした主人公の「分裂症」(英語によって宙吊りにされた自己)は、この小説のタイトルに象徴的に示されている。もちろん、「スリー・りろ・ジャパニーズ」は、'Three Little Indians' のパロディーであるが、それは主人公一家とアメリカ先住民を重ね合わせ、彼等を白人の眼差しで描いてみせたのである。Little は、「(手をさしのべてやらなければとうてい1人歩きできない) 幼稚な」を含意する。「りろ」と片仮名の中に平仮名を捜入したのは、主人公一家の分裂的で同一性^{アイデンティティ}が欠如した精神状況を含意しているように思われる。主人公の「標準語」論は日本人独自の問題ではない。それは、B. B. カチュルのそれぞれの地域で土着化された(nativized) 英語の規範論¹⁶⁾に通ずるものがある。いずれも70年以降の英語論にみられるイデオロギーである。

こうした英語論はこの国の英語教科書にも反映されている。戦後50年の英語教科書史の転換点も(題材を中心にみた場合)70年代にある。その意味で、戦後の英語教科書史は、70年代を境にして前半と後半の2期に大別できる。以下、二つの時期の教科書の特徴について詳述する。

2. 書名の意味論

戦前までの英語教科書のタイトルは、一読してそれがまぎれもなく英語教科書であることを示しているものが大半を占める。この特徴はきわだっている。例えば、1887年に森有禮がW. デニングに作らせた(文部省検定の)英語教科書のタイトルは *English Readers : The High School Series* である¹⁷⁾。第二次世界大戦中に発行された教科書のタイトルは、『英語』で、それが英語の教科書であることは疑いようがない。つまり、タイトルは内容の大枠を表象しているのである。こうした呼称は70年代までは基本的に継承されていた。戦後教科書のベストセラーの第1号として君臨した *Jack and Betty* は、「あなたもわたしもヤンキー」¹⁸⁾ という価値基準が日本の社会を覆いはじめた時期に出版された。しかし同時に、アメリカを連想させずにはおかないそのタイトルの「バタ臭さ」

が、教科書をベストセラーに押し上げる役割を果たしたのだった。その意味では、*English Readers* 式の〈散文的〉タイトルの伝統を超えたように思われる。たしかに、*Jack and Betty* は *English Readers* よりはるかに戦後の時代状況にマッチしていた。その時代状況も、J.ダワーは次のように記している¹⁹⁾ ——。

戦時のスローガンのなかで最も使い古された言葉、たとえば「協力する」とか「頑張る」といった言葉は、戦後の再建、平和、民主主義、新日本のために働こうという宣伝にもよく使われたものであった。なかでも、戦後「新しい」とされたスローガンや奨励の言葉の多くは、じつは古くて馴染みのあるものであったが、そのことを最もよく示していたのは、ほかならぬ「新しい」という表現そのものであった。「新しさ」を崇拝する傾向は、あらゆるところに見られた。出版界だけでも、戦後三年のあいだに出版された雑誌の名前に「新」の字か「新しい」という形容詞が入ったものは、優に百を越える。

ダワーに従えば、「新しい」「ニュー」を本質的に好む日本人の体質と *Jack and Betty* というタイトルは見事に一致したことになる。しかしながら、*Jack and Betty* が英語の教科書のタイトル以外の何物でもないという意味で、基本的には伝統の枠の中におさまっていると言える。ジャックとベティがアメリカ人の典型的名前の一部であることを承知していれば、それが、英語の教科書のタイトルであることに異和感はない。その意味で *Jack and Betty* は、*English Readers* を言い換えただけであるとも言える。

この言い換えは、その後極端に進み、それが英語の教科書のタイトルだと分かるのは、そのタイトルが英語で書かれているからという状況に至っている。例えば、その「無国籍」ぶりがきわ立っている *Apricot*²⁰⁾ はどうか。このタイトルから英語の教科書のタイトルを論理で読み解くのは不可能である。森の *English Readers* から萩原恭平の *Jack and Betty* を経て *Apricot* (1999年度版) に至る一連の流れをどのように読み解いたらよいのだろうか。

そこでまず、最新版 (1999年現在) の高校用英語教科書のタイトルを

アルファベティカルに並べた一覧表を提示しておく。チェックしたのは全部で72種類の教科書である。中学校用のものはリストに挙げてないが、全部で7種類しかないで、必要に応じて適宜言及する予定である。72種類の中には、いわゆる総合教材と呼ばれる素材を並べたもの、オーラル・コミュニケーションを目的として作成されたものなどあらゆるジャンルのものが含まれている。一覧表の中の「備考(1)」の①はタイトルの原文に近い日本語訳、②(あるいは、③)は、そのタイトルの含意を筆者が任意に〈翻訳〉して示したもの。したがって、極めて主観的なものだが、見当違いはしていないと考える。「備考(2)」は、そのタイトルが、比喩的なものかどうかを示したものである。「比」という記号は比喩的であることを示してある。空欄の部分は、タイトルが即物的(つまり、No15の *Daily English Course* のように、タイトル自体が英語教科書のものであることを示している)か、No13の *Clipper English Course* のように、即物的用語と比喩的用語が同時並行的に使われているものの2種類のものがあることを示しているが、ここでは、比喩的なタイトルだけに絞って表記してある。

英語教科書(高校用)の名称

	タイトル	出版社	備考(1)	備考(2)
1	(New) Age	研究社出版	①「新時代」 ②「21世紀の英語はこれだ」	比
2	(New) Atlas	三友社出版	①「新地図」 ②「エーゴ de 新世界」	比
3	Aurora	中教出版	①「オーロラ」 ②「英語が拓く美しい世界」 ③「いろいろな英語」	比
4	Access to English	開拓社	①「英語へのアクセス」 ②「こうすれば英語はものになる」	
5	Acorn	啓林館	①「どんぐり」 ②?	比
6	Apricot	文英堂	①「あんず」 ②?	比
7	On Air	開拓社	①「放送中」 ②「ニュース英語に強くなるう」	
8	Active English	一橋出版	①「アクティブ英語伝達法」 ②「元気に英語を話そう」	
9	Birdland	文英堂	①「鳥の国」 ②? (鳥の国の鳥のようにピーチク・パーチク英語で話してみよう)	比

10	(New)Cosmos	三友社出版	①「宇宙」 ②「英語で世界を知ろう」	比
11	Crown	三省堂	①「王冠」 ②「正統英語」「正しい英語」	比
12	Creative	第一学習社	①「創造的」 ②「英語で新しい世界を創り出そう」	比
13	Clipper English Course	大修館書店	①「英語修得高速船」 ②「英語速修速術」	
14	Dream-Maker	三省堂	①「夢工房」 ②「英語はあなたの夢を実現する」	比
15	Daily English Course	池田書店	①「毎日の英語コース」 ②「これを毎日やれば英語はモノになる」 ③「日常会話」	
16	Departure	大修館書店	①「出発」 ②「英語で新しい世界の体験を」	比
17	English 21	東京書籍	①「21世紀の英語」 ②「これぞ斬れば血が出る英語」	
18	Evergreen	第一学習社	①「常緑」 ②「英語をやっていつも新鮮でいたい」	比
19	English Street	第一学習社	①「英語の街」 ②「実用英会話」「通ずる英語」	
20	English Pal	桐原書店	①「英語は友だち」 ②「英語となかよし」	
21	English Now	開隆堂出版	①「現代の英語」 ②「生きた英語を身につけよう」	
22	Echo	三友社出版	①「エコー」 ②「英語で話すから相手も応えられる」	比
23	Expressways	開隆堂出版	①「高速英語」 ②「あっという間に身につく英語術」	比
24	Fresh English	第一学習社	①「新しい英語」 ②「これぞ旬の英語」	
25	Go, English!	東京書籍	①「進め、英語」 ②「英語にひれ伏して」	
26	Genius	大修館書店	①「英語の核心/天才」 ②「あなたもわたしも英語天才」	比
27	(New)Horizon	東京書籍	①「新しい地平線」 ②「英語が新しい世界を拓く」	比
28	(New)Harmony	開拓社	①「新しい人の輪/友情」 ②「エーゴ de なかよし」	比
29	Hello English	学校図書	①「英語よ今日は」 ②「いつでもどこでも英語を話そう」	
30	Hello there!	東京書籍	①「こんにちは！」 ②「英語 de オッス」	
31	Interact	桐原書店	①「交流/ことばのキャッチボール」 ②「英語での付き合い方/日常英会話術」 ③「英語で異文化理解」	
32	Interface English Reader	日栄社	①「異文化理解のための英語読本」 ②「英語をやれば外国が分かる」	

33	Lingua-Land	教育出版	①「ことばの国」 ②「英語の国」	比
34	Lighthouse	研究社出版	①「灯台」 ②「英語が未知の世界をてらす」	比
35	Legend English	開拓社	①「伝説の英語」 ②「英語は文明語」	
36	Listen to the World	教育出版	①「英語の声を聴け」 ②「英語をやれば世界の人の考えが分かる」	
37	Milestone	啓林館	①「里程標」 ②「英語があなたの知識の尺度」	比
38	Mainstream	増進堂	①「中心」 ②「英語をやれば差別されません」	比
39	Oak English	開拓社	①「かしの木英語」 ②「ちっとやそっとではびくともしない英語」 ③「英語はあなたをかしの木のように強くする」	
40	Ocean	啓林館	①「大海原」 ②「人生の大海原に英語でこぎ出してみよう」	比
41	One World	教育出版	①「世界は一つ」 ②「英語が世界を一つにする」	比
42	Orbit	三省堂	①「軌道」 ②「英語を学ばないと「人生の軌道」をはずれますよ」	比
43	Phoenix	開隆堂出版	①「不死鳥」 ②「英語は不死鳥の如くしたたか」 ③「英語を身につけて不死鳥のようにしたたかになろう」	比
44	Polestar	数研出版	①「北極星」 ②「人生の目標に英語で到達しよう」 「英語は人生の目標を明らかにしてくれる」	比
45	Powwow English Course	文英堂	①「かんかんがくがく英語」 ②「アメリカの〈土人〉のように英語でわいわいやろう」	
46	Progressive	尚学図書	①「進歩的」 ②「英語で前進せよ」 ③「英語は進化する／英語を学んであなたも進化する」	比
47	Practical English	池田書店	①「使える英語」 ②「英語は使えてこそ意味がある」	
48	Quest	尚学図書	①「探求」 ②「英語を学んで何か本物を探求しよう」	比
49	Raccoon	筑摩書房	①「あらいぐま」 ②?	比
50	Royal English	旺文社	①「正統英語」 ②「学ぶなら（英国王室で使われる）正しい英語を」	

51	Royal English communication	旺文社	①「正統英語コミュニケーション」 ②「話すなら正統英語で」	
52	(New)Stage	池田書店	①「新しい舞台」 ②「英語を身につけ世の中に出て行こう」	比
53	(New)Step English	一橋出版	①「あらたな第一歩は英語で」 ②「人生の新しい一歩は英語で」	
54	(New)Stream	増進堂	①「新潮流」 ②「世界の新しい潮流を掴むのは英語」	比
55	(New)Sunrise	旺文社	①「新しい日の出」 ②「英語で陽出ずる国の先兵たれ」	比
56	Spectrum	桐原書店	①「スペクトル」 ②「英語で世界をみると決して一様でないことが分かるだろう」	比
57	Spiral	一橋出版	①「らせん」 ②?	比
58	Step	旺文社	①「第一歩」 ②「英語で人生の一步を踏み出そう」	比
59	Sunshine	開隆堂出版	①「太陽」 ②「英語で人生を明るくしよう」	比
60	Select	三省堂	①「精選英語」 ②「はえ抜き(えりぬき)の英語を学ぼう」	比
61	Sailing	啓林館	①「航海」 ②「英語で冒険してみよう」	比
62	Speak to the World	教育出版	①「世界に向かって発信せよ」 ②「世界に向かって発信する言語は英語」	
63	Speak out	桐原書店	①「素直に述べなさい」 ②「英語で思っていることをずばり言う習慣を身につけなさい」	
64	(New)Start	旺文社	①「新しい出発」 ②「さあ英語で新しい世界をひらこう」	比
65	Tomorrow	啓林館	①「明日」「未来」 ②「英語をやれば未来は明るい」	比
66	Talk Up	啓林館	①「はっきり意見を述べよ」 ②「くずくずしないで、英語で何か言って」	
67	Treasure Land	文英堂	①「宝島」 ②「英語で宝探しをやろう」	比
68	Unicorn	文英堂	①「一角獣」 ②?	比
69	Vista	三省堂	①「展望」 ②「英語の勉強が展望をひらく」	比
70	(New)World	三友社出版	①「新世界」 ②「新しい世界の基準言語は英語」	比
71	Windmill	筑摩書房	①「風車」 ②?	比
72	Why English	学校図書	①「何故英語なのか」 ②「英語は世界語(国際語、共通語)」	

次にここに挙げたタイトルの意味について分析しておきたい。総数72のタイトルの中で、明らかに比喩的な用語と考えられるものは45で、半

数以上を占める。*Jack and Betty* より以前の教科書のタイトル（「英語教科書の1世紀（1）」『成城文藝』第173号参照）とは、明らかに違う。既に述べたように、*Jack* と *Betty* は、アングロ・サクソン系アメリカ人のポピュラーな名前であるから、まだしも英語の教科書の名前として圧倒的な異和感はない。しかし、*Acorn* や *Apricot* となると、化粧品や女性週刊誌の名称としても通用する。以下、比喩的書名の意味論的記号論的特徴も列挙する。――。

(1) 動物：

- ① *Birdland* ② *Raccoon* ③ *Unicorn* ④ *Phoenix*

(2) 植物：

- ① *Acorn* ② *Apricot* ③ *Oak* (English)

(3) 宇宙・世界・自然：

- ① *Aurora* ② *Cosmos* ③ *Horizon* ④ *Ocean*
⑤ *One World* ⑥ *Orbit* ⑦ *Polestar* ⑧ *Stream*
⑨ *Sunrise* ⑩ *Spectrum* ⑪ *Sunshine* ⑫ *World*

(4) 理想・飛躍・未来：

- ① *Age* ② *Creative* ③ *Dream-Maker* ④ *Departure*
⑤ *Expressways* ⑥ *Evergreen* ⑦ *Harmony*
⑧ *Lighthouse* ⑨ *Milestone* ⑩ *Mainstream*
⑪ *Progressive* ⑫ *Quest* ⑬ *Spiral* ⑭ *Step*
⑮ *Select* ⑯ *Sailing* ⑰ *Start* ⑱ *Stage*
⑲ *Tomorrow* ⑳ *Treasure Land*

(5) その他

- ① *Atlas* ② *Crown* ③ *Echo* ④ *Genius* ⑤ *Windmill*

以上の特徴とは別に、J.ダワーの言う「ニュー」も盛んに使われる――、① *New Age* ② *New Atlas* ③ *New Cosmos* ④ *New Horizon* ⑤ *New Harmony* ⑥ *New Stage* ⑦ *New Step English* ⑧ *New Stream* ⑨ *New Sunrise* ⑩ *New Start* ⑪ *New World* などである。*New*～は、版を改めた時につける、というのが一般的ルールであるが、中学校用の教科書 *New Crown* のように、初版から *New*～をつけるのも決して稀ではない。ここで再びダワーに登場していただく。

「ニュー」という英語を使う雑誌も多数あった。これらの雑誌の内容をみると、「新しさ」の恩恵をうけることが、いかに憧れの的になっていたかがわかる。たとえば、読者が「新しさ」を味わうことができたものには、新しい時代、新しい文化、新しい民主主義、新しい教育、新しい地理、新しい歴史、新しい希望、新しい労働、新しい生活、新しい映画、新しい会社員、新しい学校、新しい詩、新しいスポーツ、新しい道、新しい女性、新しい世界、新生民主仏教、新しい文学、新しい俳句、新しい結婚、新しい自治、新しい世紀、新しい自由、新しい自由人、新しい社会、新しい科学、新しい農民、新しい農村、新しい若者、新しい警察、新しい家族、新しい美容、さらには「ザ ニュー ハッピー スター [新しい幸福の星]」という意味のよくわからないものまでがふくまれていた。²¹⁾

以上の論述の後に、ダワーは次のように言う——、「しかしながら、戦時中のスローガン「光ある 歴史に結べ 新文化」にみられるように、「文化」や「明るさ」と同様「新しさ」は、帝国日本のイデオロギーのまさに心臓部にあった発想であった」と。ダワーのこの論述に従うなら *New Crown* (三省堂) というタイトルは、「帝国日本のイデオロギーのまさに心臓部にあった発想」を継承していることになる。もともと *Crown* (王冠) という名称は、戦後半世紀の英語教育を70年代に転換させた教科書のものとは思えないほど時代錯誤的である。書名としての *Crown* は、1916年に同じ出版社から出版された *Kanda's Crown Readers* まで遡る。それは、長い長い伝統を引き継いだものなのである。神田乃武がこれを書いた1916年と言えば、日英同盟 (1902) から14年目、日本がイギリスと政治的にも深い関係にあった時期である。イギリス王室の象徴である「王冠」が、日本の一英語教科書のタイトルとして使われたとしても不思議ではない。しかしながら、戦後半世紀を経た今日まで生き延びているという事実は、両国の関係が歴史的にいかに非相互的であったかを物語るものだろう。この関係性は、今日のもう一つの書名 *Royal English* にも生き残っている。中学校の教科書の一つ *Columbus* は、西洋中心史観の一翼を担う人物名を書名とするほどの政治的無意識ぶりを示している。森の *English Readers* から *Jack and Betty* を

経て *New Crown* や *Columbus* に至る書名の変遷史は、日本の国際関係がアングロ・サクソンとの二国間関係であった（そして、今も変わらない）という意味で、本質は何も変わっていないことを示している。ただし、ここでいそいでつけ加えておかなければならないことがある。森の *English Readers* は、対アングロ・サクソンを意識したものであったことは間違いないが、森自身が、西洋の超克に一生を賭けた人物であっただけに、*English Readers* の *English* は、森にあっては、価値中立的とは言えないまでも、*Royal* や *Crown* では決して置き換えられるものではなかった。

さて、今日の書名には比喩的な用語が半数以上を占めることは、既に述べた通りだ。問題は何かか、であるが、それは比喩用法が、(3) (4) (p. 57) に集中していることと関係があるとみる。比喩用法の大半が(3)と(4)に集中しているのは、特筆すべきことである。「国際化」が合言葉になりはじめた70年代に〈新しい〉スタートを切ろうとする英語教科書は、*New*〜がもっとも時代に合った書名だった。それから20年、「グローバル化」時代を迎えた英語教育は、またまた〈新しい〉スタートを切らなければならなくなった。それは、第二次大戦直後の状況と酷似している。「敗北を抱きしめて」日本人は、戦争の総括を一度も経ないで、あるいは天皇制というタブーに一度も挑戦することもなく、「新日本」の建設に突き進んだ。「グローバル化」は、「大東亜建設」や「文化国家日本」「新日本建設」にとって代わったスローガンである。そのスローガンを「抱きしめて」新しい日本人を創り出す英語教科書は、学習者に何よりも夢や理想を与えるものでなければならない。それには論理的で即物的タイトルはふさわしくない。戦争中の1944～45年に、『英語』という書名の教科書が、戦後の1980年には『にほんご』という書名の非検定教科書²²⁾が出版された。共にもっとも即物的なタイトルだが、そうした書名では、青少年に「夢」や「理想」を与えることができない。書名もよろしく「未来」志向でなければならないのである。

こうした「夢」(*Dream-Maker*)、「理想」(*Vista*)、「探求」(*Quest*)、「新鮮さ」「若さ」(*Evergreen*)、「未来」(*Tomorrow*)は、伝統的日本人の「心性」を示す記号と言える。それには二つの要因があるように思われる。その一つは、外国語の習得を単なる技能の習得とみなし得ない「教養主義」と「修養主義」の伝統である。それは、外国語を、実用から離れて、

それ自体として学ぶことになった明治30年頃から大正期を通して形成されたものであるが、それを一方で支えたのが、儒教文化であることは、本稿の(1)でも述べた。その「教養主義」文化を象徴するものの一つが〈旧制高校文化〉で、その負の側面を描いたのが高田里恵子の『文学部の病い』²³⁾である。その病いとは戦争中に「体制に迎合するでも抵抗するでもない半端な態度を通した」一ドイツ文学者が「善良な小心者であったがゆえに、結果的には戦争に加担してしまった」²⁴⁾生き方である。著者はそうした病理を「旧制高校文化、ひいては彼らが心酔したドイツ経由の教養主義に求める」²⁵⁾のである。ことは何もドイツ文学に限らない。ドイツ文学を英文学、米文学、フランス文学で置き換えても事情はいささかも変わらない。また、ことは一人のドイツ文学者に限らない。「ドイツ文学者」を「英文学者」「フランス文学者」で置き換えても同じである。つまり、この国の外国文化(文学・語学)の研究者、ひいては広くこの国の「知識人」が共有する「心性」を、著者は病理と呼んだのである。その病理は、こうも言い換えられるだろう。それぞれの研究者が鏡として学んだ、それぞれの外国(西欧)文化は、彼等にとって何よりもまず近代化の象徴として存在した。その文化を切り売りすることで成立させた、大学の教師・研究者・翻訳者たちの生活手段は、自らの身体や現実から遊離した**ことば**であった。皮肉なことに、**ことば**が自らの身体や現実から遊離すればするほど、つまり、抽象化した**ことば**を操ることができるようになればなるほど、**ことば**が創り出す自閉的な世界に自らを閉じ込め、政治的には完全に無意識化した。そのことを英文学者について書いたのは、宮崎芳三である。宮崎は、『太平洋戦争と英文学者』²⁶⁾の中で、大和資雄をとり挙げて、大和が戦前に出版した『英文学の話』の序の末尾に、「皇国の名を負う大和資雄」と記しながら、戦後同じ本をそのまま出版したことを批判している。アングロ・サクソン経由の教養主義が大和の政治的無意識を生み出したのだと考える。太平洋戦争は、何も英文学者とだけ関係があったわけではない。あまたの英語教師もいやおうなく関係したのである。しかし、戦後の英文学者や英語教師の中には、高村光太郎の『暗愚小伝』に匹敵する自己批判の文章を公にした者はほとんどいない²⁷⁾。理由は、中野好夫の言うように、すべての英文学者と英語教師が「腰抜け」だったからに違いないが、「腰抜け」論だけでは十分説明がつかない。もっと根源的理由は、英文学者や

英語教師のAnglo・サクソン経由の「教養主義」にあった、と考える。それは、Anglo・サクソン文化を日本人の視点から世界秩序^{ワールドオーダー}の中で捉えようとするものではなく、Anglo・サクソンの小説や詩、あるいは演劇を、あたかもイギリス人になったかのように錯覚して、楽しむ境地の謂なのである。こうした境地から生まれる人物は、イギリス人に対しては、限りなく劣等感を抱き、同胞の日本人に対しては、本物の人間（イギリス人）に近い優れた人間として振る舞うのである。しかし、自分が擬似イギリス人であることは十分承知しているため、自らの仮面をはがされまいとして、社会の現実を無視した超越的な人間として振る舞うことになる。擬似イギリス紳士は、政治などという猥雑な世界からは超然としていなければならないのである。政治的無意識の人間になっても当然だった。単なる教養主義は、文化帝国主義的人間を生み出しても、それを批判的に読み解く人物は生み出さないのである。

今日の英語教科書の比喩的タイトルは、こうした教養主義と修養主義がないまぜになって生まれたものだ。しかし、それだけでは比喩的タイトルの人気を十分説明できない。もう一つの要因は、教科書出版界を支配する市場原理である。高校の教科書の採択は、基本的に学校採択である。中学校の場合と比べ、採択に関わる政治的影響は少ない。そうになると、出版社は行政の顔色より、個々の教師の顔色が気になる。つまり、いかに学校現場の要求に応えるかが、出版社にとっての至上命令となる。一方では、教科書のタイトルは、教科書という商品の中身を一言で言い表すことのできるものでなければならない。しかし、もう一方では、市場原理が支配する教科書界にあって、書名は、コマースの「キャッチ・コピー」と同じ働きをする。したがって、しばしば中身とは関係なく、書名自体が採択を左右しかねないほどの役割を果たす。その結果、*Apricot* や *Evergreen* のように中身を想像することさえ困難な書名が登場する。(3) (4) (p.57) に挙げた書名の多くが、「教養主義」や「修養主義」を連想させるのとは対照的に、*English Pal*, *Go, English!*, *Hellow English*, *Hellow There!* など、「映像文化の申し子」とでも言える〈軽さ〉を前面に打ち出したものである。それはあたかも、「もう学問としての英語の勉強はやめましょう」「習うなら使えるようにしましょう」(有用主義)と言わんばかりのものである。いったい、「教養主義」「修養主義」「有用主義」「(*Apricot* のような) 無国籍主義」を標榜するタ

イトルのもとに書かれている内容はどのようなものか。次章でその点を詳述する。

3. 「戦後民主主義」

1970年代を分水嶺として、70年代以降のきわだった特徴は、「戦後民主主義」の理念が、教科書に色濃く出始めたことである。戦後民主主義の理念は、「民主・平和・人権・平等・自由」である。こうした理念を徹底的に追究したのが『ニュー・クラウン』（三省堂〔初版1978〕）であった。その書名の自己矛盾については既に述べた通りだが、中身はそれまでの教科書教材とは、（その本質において伝統を引き継ぎつつ）扱う題材の射程が激変した。*Jack and Betty* の理念をほぼ完全に引き継いだ *Prince* には、現在なら袋叩きにあうであろう「ロビンソン・クルーソー」を素材として使いながら、ほとんど批判のないまま通用していた。それは、70年代以前の英語教材のイデオロギーを象徴するものである²⁸。そのイデオロギーは、白人中心の眼差しで、異民族を眺める植民地主義的「他者観」にはかならないが、そうした他者観が、70年代まで英語の教科書で生き続けたという事実は記憶しておく必要がある。つまり、戦後「敗北を抱きしめて」新国家の建設のために新しいスタートをきったはずの教科書出版界も、英語の教科書の題材だけは、まるで聖域のように手つかずだった。

理由ははっきりしている。英語の教科書の言語が、アングロ・サクソンの言語であったという当り前の事実にある。英語はアングロ・サクソンの言語である以上、英語の教科書がアングロ・サクソンを扱うのは当然のことと考えられた。英語教材としての「ロビンソン・クルーソー」に、現場はもちろん、教科書作成者も、そして社会科の教科書の内容には格別の関心を持っていた多くの知識人も、そしてさらに、何事につけ批判的視点を忘れてはならないはずのジャーナリズムも一切関心を示さなかったことが、英語教科書史に通底する「アングロ・サクソン中心主義」を雄弁に物語っている。この英語とアングロ・サクソンの関係にくさびを打ち込もうとしたのが『ニュー・クラウン』であった。

『ニュー・クラウン』は、「民主・平和・人権・平等」という戦後民主主義の理念を、英語教科書に生かすのに、その理念を次のように読み替

えた。つまり、「脱アングロ・サクソン」を実践するために、あるいは、アングロ・サクソンを相対化するために、〈比較文化〉という枠組で、戦後民主主義の理念を読み替えたのである。アングロ・サクソンを相対化するためには、アングロ・サクソンの内部にあって国内の「第三世界」の役割を果たしてきた少数民族の文化と、アングロ・サクソンに支配されてきたアジア・アフリカ諸国に光を当てる必要があった。それぞれの文化には、それぞれの歴史と共にそれぞれの価値観があることを示すのが目的であった。

例えば、アングロ・サクソン内部の異文化として（イギリスの）ウェールズをとり挙げ、彼等の母語と自民族の文化への思いを書き込んだのは、彼等の母語への言語権（つまり、人権）を学習者に意識させようとしたものである。ケニアを扱った課では、ケニアがかつてイギリスの植民地であったことに言及した。おそらく、「植民地」という概念が、アングロ・サクソンとの関わりで登場するのは、これが戦後の英語教科書史上はじめてであったろう。かつての植民地であったケニアでは、大学教育を受けるためには宗主国のイギリスへ行くしかなかったが、現在では自前の大学もあることを書いている。グローバル化が進んだ今日からみれば、関係の非相互性は一向に解消されず、先進国に搾取され続けている「第三世界」を、「自前の大学もある」程度の記述では、問題の何の解決にもならないが、小田実が日本の英語教育を「植民地教育」と規定した1974年から4年しかたっていない1978年の段階では、教科書にアジア・アフリカがとり挙げられること自体が一種の「革命」だった。まして、It (ケニア) was once governed by Great Bntain. という文章などは、驚天動地の一文だった [資料(1)]。もちろん、今日の時点からみれば、お話にならないくらい甘い。「ケニアでは英語も話されています」は、まぎれもない事実だが、その社会・文化的意味は何一つ問われていない。教え方によっては、「だから一生懸命世界の共通語である英語を勉強しましょう」となる。実際は、英語が使われているのは、その背後に、母語を話すと「私はバカです」(I am stupid. /I am an ass.) と書かれた方言札を首にぶらさげられたり、鞭で打たれるといった虐待の歴史があつてのことだ。(Ngúgí wa Thiong's: *Moving the Center*, James Currey, 1993, p. 31.)

『ニュー・クラウン』は、今日喧伝されている「多言語主義」や「多文化主義」の先鞭をつけた、と言ってよい。平成2年度版の見開きの言

語地図 [資料(2)] は、そのことをもっとも雄弁に語っている。実際、『ニュー・クラウン』の本文に登場する英語以外の言語は、フランス語、スペイン語、エスペラント、中国語、朝鮮語、スワヒリ語など様々である。こうした「多言語主義」と「多文化主義」的題材は、ただちに他社の模倣するところとなって、今日表面的にはどの教科書も似たりよったりの題材を並べているようにみえる。そして、それが英語教科書の題材のあるべき姿のようにもみえる。もしそうだとすれば、教科書の著者たちに残された仕事は、類似の題材の洗練化以外にない。それは技術の問題であって、教科書題材の本質とは直接の関係性はない。実際70年代に〈革命的な〉問題提起をした『ニュー・クラウン』が、本質において変わっていないのは、その問題提起に普遍性があるて変更や修正の必要が認められないと著者たちが考えているのか、あるいは70年代に提起した問題を越えられないでいるのか、どちらかである。もし前者なら、彼等に残された仕事は、既存の題材の洗練化か、あるいは装いを変えて提出することである。もし後者なら、著者たちが英語問題をそれ以上の次元で考えることができないか、市場原理に身をゆだねて「売れること」だけを考えている、のどちらかであり、いずれの場合も装いを変えて同じ題材を繰り返す以外に仕事は残っていない。

『ニュー・クラウン』が提起した「多言語・多文化主義」の問題は、多言語主義と多文化を推し進めれば推し進めるほど、英語一言語主義 (English monolingualism)²⁹ とアングロ・サクソン一文化主義 (Anglo-Saxon monoculturalism) を推し進める結果となり、その自家撞着を解決できないことである。『ニュー・クラウン』の *The Story of English* (中学校3年生 [1993年度版]) の最後は、(多様な英語の変種の存在を認めた上で) This is the age of new Englishes. で締めくくっている。この一文は、英語の「脱アングロ・サクソン語化 (母語化)」を志向するものではあっても、「脱英語化」では決してない。あくまで、「英語」が前提である。この前提がすべての出発点である。しかし、今日この前提こそ疑ってかかるべきである。そのような前提に立たない限り、学習者に教科書の選択権を認めていない現行制度を容認できないはずだ。英語教科書の作成者たちは、英語をほぼ無条件に強制することが、本質的に人権問題であることに気がついていない。ここでも戦後民主主義の理念は、既に崩壊している。「人権・平等」を基本理念とする戦後民主主義は、「英語問

題」には手をつけたことは一度もない。いや、手をつけなかったのではない。手のつけ方が間違っただのである。英語による格差 (English-divide) を無化するために、英語を第二の公用語にするという提案がそれだ。この主張は、英語の標準語によって生ずる「差別」「格差」を解消するためには、すべての人が標準語を使えるようにすべき、と主張する J. ハニーの議論³⁰⁾と同じである。それを主張する人間が、共に「ことばのエリート」であるから、彼等は英語が生み出す既得権と利益を擁護する結果となり、English-divide は、むしろいっそう進むものとする。英語教育の非倫理性を批判するのは R. フィリップソン³¹⁾だが、同様の批判は、日本の英語教科書のありようにも向けられてしかるべきである。学習者の全員に特定の民族語を強制する現行制度は、出版社・著者の既得権益を護るのに貢献し、事柄の本質を隠蔽している。現行の教科書制度は、そうした状況を再生産している。非倫理的とはそういう意味だ。特定言語の全員履修を義務づけた現行制度は、一方でその言語のエリートを創り出すと共に、その言語の「劣等人間」を生み出す。それを「言語帝国主義」と呼ぶ。ファノンの言う「黒人は言語によって定義される」³²⁾は、カリブの黒人だけの問題ではなく、現代日本の問題なのである。そこで以下現行の教科書を、本文構成の其本的イデオロギーと題材について、具体的に分析してみたい。

(1) 本文の「拝借主義」:

中学校の教科書の本文は、大概日本人が最初の原稿を書き、それを英語の母語者が修正するという手順ででき上がる。しかし高等学校の場合には、本文の言語的レベルが高いこともあって日本人がいきなり書いたものが載ることは稀である。もちろんこれにも例外があつて、*First* (三省堂) の I・II の本文はすべて日本人の書いたものである。日本人の立場で、日本人の学習者のためという方針を徹底するとそうなる。しかし、今回筆者が調査した高校用の総合教材 I・II と Reading の本文はほとんど、出典があつてそれをそのままか、日本人の編集者が教科書に合うようにアレンジしたものが圧倒的に多かった。次に一例を示す。

(A) Lesson 1 Ralph F. McCarthy : "Violet" in *American Folk Tales*.
Kodansha International Ltd., 1989.

Lesson 2 Maiiory Fromm : "Tourist Watching in Britain" in

- Characters and Characteristics*. Seibido Co., Ltd., 1984.
- Lesson 3 Dmitri A. Borgmann : "Sentence Palindromes" in *Language on Vacation*. Charles Scribner's Sons, 1965.
- Lesson 4 Richard D. Lewis : "Faithful Hachiko" in *Reading for Adults 2*, New Edition. Longman Group Ltd., 1982.
- Lesson 5 Margaret O. Hyde : "Honeybees" in *Treasure Gold*, ed. by Mae Moore Campbell. D. C. Heath and Company, 1968.
- Lesson 6 Ernest Hemingway : "Cat in the Rain" in *In Our Time*. Macmillan Publishing Co., Inc., 1987.
- Reading for Information (2) Stephen Rabley : "Where does the does the money go?" in *Macmillan Dossiers—Youth Culture*. Macmillan Publishers Ltd., 1989. Thomas G. Gunning : "Reading Charts and Tables" in *Focus on Reading 3*. Merril Publishing Co., 1989.
- Lesson 7 Roald Dahl : "Goat's Tobacco" in *Boy*. Seibido Co., Ltd., 1988.
- Lesson 8 Stephen Rabley : *Macmillan Dossiers — The Green World*. Macmillan Publishers Ltd., 1989.
- Lesson 9 Kurt Rowland : "Nature's Patterns" in *Pattern and Shape*. Ginn and Company Ltd., 1964.
- Lesson10 Yoshiko Uchida : "The Bracelet" in *Another Earth, Another Sky*, ed. by Sam L. Sebesta. Harcourt Brace Jovanovich Inc., 1982.
- Lesson11 Judy Taylor et al. : "Creative Years and the Lake District" in *Beatrix Potter 1866~1943*. Frederick Warne & Co., Inc., 1988. Revised and arranged by Nicholas J. Teele.
- Lesson12 Helen Keller : "The Most Important Day" in *Appreciating Literature*. Macmillan Publishing Co., Inc., 1987.

- (B) Lesson 1 A New English Teacher 書き下ろし。
 Lesson 2 I Ran for Everybody Sandra Heyer, *True Stories in the News: A Beginning Reader*, Longman Inc., 1987.
 Lesson 3 Davy Crockett's Tall Tales 書き下ろし。
 Lesson 4 "Meeeoow!" Kenneth Y. Sagawa, *Communicating with Others*, 桐原書店。
 Lesson 5 Where Do the Names of the Months Come from? Robert J. Dixon, *Elementary Reader in English*, Regents Publishing Company, Inc., 1971.
 Lesson 6 What Happened to the Dinosaurs? 書き下ろし。
 Lesson 7 Gairaigo—Foreign Words in Japanese 書き下ろし。
 Lesson 8 The Story of the Futon of Tottori Lafcadio Hearn, *Strange Stories*, 研究社出版。
 Lesson 9 Hints for Memorizing 書き下ろし。
 Lesson 10 Serve, the Three-legged Dog 書き下ろし。
 Lesson 11 The Luckiest Man on the Face of the Earth Robert J. Dixon, *Elementary Reader in English*, Regents Publishing Company, Inc., 1971.
 Reading 1 Let's Bake an Apple Pie 書き下ろし。
 Reading 2 The Sand of the Sahara 上前淳一郎「読むクスリ」
 文藝春秋。
 Reading 3 Louis Pasteur 書き下ろし。

Lighthouse 1—研究社出版

(A)は、Reading の教材であり、(B)は総合教材英語 I の教材という違いがある。そうした違いを考慮しても、(A) (B)の違いは歴然としている。(A)は、すべての教材が借り物であり、(B)は、いくつもの教材を独自に書き下ろしている。(A)の場合は、何故この教材を選択するのか、(B)の場合は、何故この課は書き下ろしでなければならないのか、共に相当の議論があったはずだ。厳しい吟味と議論の末出来上がった教科書は作成者の言語(英語)観、民族観、あるいは広い意味の世界観をいやでも表象することになる。

「教養主義」の影響で、読ませる作品は、英米文学の名作 (canon) でなければならないという伝統的な考え方がある。こうした考え方は、70年

代以降様々な英語の変種を自立的な英語として認めようという言語における相対主義の台頭と共に、人気がなくなった。しかし「名作主義」が不人気になっても「英語の母語信仰」は「英語のネイティブ信仰」と共に、衰えることなく今日まで引き継がれている。(A)は、扱う文化圏が、Lesson 4 と10が日本であるが、英語自体はすべて母語者の手になるものと思われる。(B)の場合は日本人が相当に関わらなければ形にならないはずである。

問題は(A)である。英語教科書における名作主義の衰退は、英語の中の特定の dialect に、「象徴的資本 (あるいは権力)」(symbolic capital [power]) を与えないという言語における「戦後民主主義」の影響をみてとれるが、すべての教材を借りてくるという教科書作りについては問い直してみる必要がある。第1は、ある素材の採用の基準をどこにしているか、であり第2は、借り物でもって一つの教科書を作り上げる場合、日本人の著者の立場 (position) はどうなるのか、である。まず第1について——、少なくとも(A)を見る限り、教材選択の基準はまったく見えない。強いて言えば、政治的に無意識であることをよしとする立場によって選んでいる、と言ってよいであろう。第2の問題について——、すべての教材を借り物にした場合、著者の仕事はそれを解釈することであって、著者の身体から出たことばを、間接的に伝えるという役割しか果たせない。こうした「借り物主義」は、日本人の教科書作成者を解釈主義者に仕立て上げ、自らの肉声を学習者に聞かせることができなくなる。筆者にとって「国語」の「現代文」の授業が面白くなかったのは、一つは筆者自身の日本語力が低かったこともあろうが、もう一つには、教授者が解釈ばかりを聞かせて、自らの肉声を聞かせることがなかったからだと思う。しかも学習者と作成者の間には、教師というもう1人の解釈者が介在する。英文を読む行為は、結局一貫して解釈によって成り立っている。解釈はことばによって成立するのであるから、解釈主義はことば主義を生み出す。ことば主義は、ことば (のみ) が reality を創り出すという錯覚を起こさせる。こうした「借り物」主義教育の下で育ったエリートたちは、ことばのテクノクラートになって、「文字持ち」として、社会を牛耳ることになる。こういう危険性は、英語が、アングロ・サクソンの言語であるため、英語の母語者の書いた文章を主体に選択し教科書に採用すれば、学習者はアングロ・サクソンの眼差しで世界を観るようにな

るのが普通だ。(A)には、A. ペニクックが主張するような「批判的教育」(critical pedagogy)³³⁾の眼差しはまったくない。それは、他の大部分の教科書についても言える。批判的立場がまったく欠如しているのは、英語をめぐる教科書の扱いである。

(2) 「外国語」「外国人」「国際人」の記号化：

80年代以降、教科書本文の内容を日本語で要約したものを本文の前に置くというのが一種の流行となった。テーマによっては、その要約に教科書作成者のイデオロギーが明確に表象される。そのもっとも典型的な例が、英語観・外国観をめぐる説明文である。以下にいくつかの例を挙げる――。

- ① 外国人から郵便局へ行く道をたずねられました。
- ② 外国人が電車の券売機のところで困っています。声をかけてあげましょう。(以上 *Birdland A*—文英堂)
- ③ 近くで外国人の姿を見かけると、英語で話しかけてみたい気持ちになることがある。(*New Stream I* , 増進堂)
- ④ ジョンは、英語を話すと評判の土井歯科医に予約の電話をする。(*New Start [oral communication A]* , 旺文社)
- ⑤ 高校2年生になった由香と達也が新しく発刊することになった外国人向けのタウン誌の編集スタッフに仲間入りした。編集長はアメリカ人大学生の Tom です。(*Powwow English Course II* , 文英堂)
- ⑥ 英語を通して世界の人々と結びあおう。(*New World II* , 三友社出版)
- ⑦ 英語は世界の共通語。(*Step I* , 旺文社)
- ⑧ 英語は役に立つ！ 海外に行って共通語である英語を使い、その国の人と交流することが多くなりました。将来あなたも、ここに登場する人たちと同じような仕事につきたいと思いませんか。(*Go, English! I* , 東京書籍)
- ⑨ 英語はもはや、英米人だけのものではありません。例えば、アジアにも、英語を使ってお互いにコミュニケーションをはかっている国があります。(*English 21 I* , 東京書籍)

⑩ 「国際人の英語」(1)(2) (*Lingua-Land I*, 教育出版)

⑪ 西洋人の女性が二人の高校生に郵便局へ行く道を英語でたずねています。いきなり英語で話しかけるとまごついてしまうものです。(*New Harmony I*, 開拓社)

言説が reality を創り出すとする A. ペニクック³⁴⁾ の議論が、(M. ホルボローの批判にもかかわらず)³⁵⁾ 一定程度の妥当性を持つのは、ここに挙げた①から⑪までの要約文が、英語一極集中状況を再生産し固定化するのに極めて効果的だからである。もちろんこうした言説の背後には、歴史に規定された「生産様式」「経済システム」があるが、経済システムだけが社会秩序を形成しているわけではない。学習者の英語観の形成は、①～⑪の言説に大きく影響を受ける。

①から⑪までの言説は、「外国語」「外国人」「国際人」が「外国語＝英語」「外国人＝英語人」「国際人＝英語人」となって記号化したことを示す。それは、「万世一系の治す天皇」が「御真影」として、1881年に以降に各学校などの公共施設に祀られるようになって、記号化したのと同じである。人は「御真影」を天皇そのものと考えた。人は、「外国語」を「英語」, 「外国人」を「英語を話す人」と考える。こうした記号化は、「外国語」「外国人」にはりついている様々な意味領域を切り捨ててしまう。結果は、「外国語」の中の「国」を持たない言語をはじめとして、英語以外の言語を完全に不可視にする。同じように、「外国人」は、⑪の例が示すように「西洋人」であり、「白人」を指し、それ以外の「外国人」を不可視にする。そうになると、英語を話す人こそ「国際人」(⑩参照)という観念が生まれる。当然、英語人が、日本で「いきなり」英語で日本人に話しかける(⑪参照)ことの方が無礼なのだという発想は生まれない³⁶⁾。英語を使えることが国際人の絶対要件なのだから、英語を「世界の共通語」(⑦)と規定するのに何の躊躇もいらぬ。何にしる英語こそ、「世界の人々を結ぶ」(⑥参照)言語だからである。この浅薄な言語思想こそもっとも厳しく批判されなければならないのに、である。実際、③のように、「外国人の姿を見かけると、(誰彼の区別なく)話しかけたい気持になる」英語奴隷がちまたにあふれている状況は、英語が話せることで「評判」(④参照)の人間を創り出すほどに、この国の英語病は充進している。

今回の調査で分かったことは、英語の教科書の英語問題に対する関心が非常に高いことだった。「環境問題」と肩を並べるほど関心が高い。全教科書のほぼ半数が、英語の問題をなんらかの形で扱っている。共通しているのは、英語有用論であって、批判的視点で書かれたものはほとんどない。市場原理が支配する英語教科書に、自らの「商品」の問題点を書くことは自らの首をしめることになるからである。こうした有用論が支配する英語言説の中にあつて、次のような作品を載せた教科書もあることは忘れずにつけ加えておきたい。

(A) A foreign language is like a looking glass.

On the other side, there is a world like the one you live in, only different.

On the other side, there are ideas you have never thought.

On the other side, as on this side, there are both despair and hope.

On the other side, there are people who also look into the looking glass, who see *you* as on "the other side."

Reading a foreign language is passing through the looking glass, into that other world.

And since it is a looking glass, what you can in the end see most clearly there is, of course, yourself.

—The Editors

(大意：外国語は鏡と同じ。

鏡の裏側には、自分の住んでいる世界と同じような世界がある。

少し違うだけ。

鏡の裏側には、想像したこともない考え方があつる。

鏡の裏側には、こちら側と同じように、絶望と希望がある。

鏡の裏側には、鏡をのぞいている人がいる、彼等はこちらの人たちを、「向こうの人」と考える。

外国語を読むことは、鏡を通り抜けて向こうの世界に入っていくことだ。

でも、鏡をのぞいているのだから一番はっきり見えるのは、もちろん自分自身である。)

この詩は、外国語学習の本質を、鏡という平易な比喩を巧みに使って説明している。一般論としての外国語学習の目的論の本質はこれに尽きる。しかし、ここでも「外国語」学習を「英語学習」と規定するイデオロギーの脱構築はなされていない。理由は簡単である。それが英語で書かれているからである。もしそれが英語でなく日本人にとっての母語である日本語で書かれているのなら、そして学習者に対象となる外国語を選択する権利と実体が保障されているのなら、この詩の説くところに納得できる。しかし、英語の教科書が、一般論としてどんなに高邁な外国語学習論を展開しようと、「その外国語は、英語だ」と（多くの学習者が）考えたとしても不思議はない。また、「鏡の裏側には、想像したこともない考え方がある」ことを発見するのは、厳密には「その民族の母語」（英語では、アングロ・サクソンの言語 [イングランド語]）を通してである。もし、編者たちが「汎用語としての英語」も頭に入れて書いたら、異文化の発見を低いレベルで捉えているか、英語使用域のグローバル化の中に文化侵略や文化破壊をまったく視野に入れていないかのどちらかだろう。この詩は、本質的に欺瞞的である。ただしも、⑥のように「英語を通して世界の人々と結びあおう」と言った方が（その「単純さ」と「お手軽さ」はここでは問わないとして）ただしも正直な言説と言える。

- (B) 「あなたにとって英語とは？」もしこんな質問をされたら、あなたは何と答えるでしょうか。そして、あなたの答えと、例えばフィリピン人が同じ質問をされたときの答えとは同じなのでしょうか。英語を通して浮き彫りにされる言語の持つ一面を読みとりましょう。

—Genius (English Readings) 大修館書店

この説明文は、'English in the Phillipines : A Question of Identity' の課に添えられた説明文である。筆者の調査では、この課が英語問題を批判的な眼差しで読み解こうとした数少ない一つである [資料(3)]。主題は、英語と Pilipino₂ に宙吊りにされたフィリピン人の言語的ディレンマについてであり、それとの対比で日本人にそのようなディレンマがあるのかどうかを問いかけるものとなっている。「外国語」が「英語」と同一視されるほどに記号化されている状況にあって、英語によって自

己の同一性を確立できないでいる民族に触れることは、英語問題を包括的に理解する上で避けては通れない。その意味で、編集者がこのようなテーマをとり挙げたことは評価されてよい。

しかしながら、次のような問題がある。問題の一つは、「借用主義」の弊害である。原文の著者は英語の母語人である³⁷⁾。「殺した側」の人間が「殺された側」の人間のことを書く場合、自らも「殺られる側」に身を置く体験を欠くと、「観客席からゲームを眺める観察者」になってしまう危険性を孕む。この課も結局観察者の文章となっている。そのことは、この課の文章と、英語教育こそフィリピン人を根なし草にしたと、アメリカの英語教育を厳しく批判するR. コンスタンティーノの文章と比べてみれば一目瞭然である³⁸⁾。しかしもっと大きな問題は、日本の学習者に、「殺される側」の人間から言えば、生きるか死ぬかの問題を、観察者の眼で書いたものを読ませることである。英語の母語者が、フィリピン人の言語的ディレンマを少しばかり知っているからといって、それに比べれば、日本人はいかに幸せであるか、と言いたげなこの文章では、英語とフィリピンとの関係と、日本語と近隣諸民族との関係には、言語社会学的観点からみると多くの共通項があるのに、それが見事に不可視にされている。また同時に、言語的宙吊り状態は、日本人にも無縁なことではない。その典型は夏目漱石であり³⁹⁾、さらに遡れば森有禮にまで達する。こうした問題は、日本人の教科書作成者が、(英語人と共同でもよい) 自ら乗り出して書くべき素材である。でなければ、こうした素材は、単なる知識で終わってしまう。つまり、またしても悪しき教養主義の産物になり果てるのである。

この *Genius* の課と同じように英語問題に批判的な作品に ‘The Day a Language Died’ (*Creative [Reading Course]*, 第一学習社) がある。アメリカ先住民の言語の一つ the Catawba language の消滅 (death) を扱ったこの課は、その消滅の原因について次のように言う――

All of us have learned over the past 20 years that modern industry can damage the world's ecology. We have seen, for example, how the destruction of the rain forest and the use of insecticides and herbicides can lead to the death of countless spieces of plants and insects. Harder to see, but just as powerful, is the influence of a cul-

ture which seeks to make everything the same, including our language and ways of life. We are witnessing the spread of English, carried by American culture, delivered by Japanese technology. We also are witnessing the great influence of a few transnational languages : Chinese, Spanish, Russian and Hindi. As these languages increase in their importance as tools of culture and business, hundreds of other languages die. They cannot compete with these stronger languages.

ここには、英語のグローバル化に対する明確な異議申し立てがある。出典は P. Pophan : *The Daily Yomiuri*, Sunday, January 28, 1996 である。この文章の迫力からすると執筆者は、先住民の一人である可能性が高い。critical pedagogy⁴⁰) を実践することはこういう課を用意することである。しかし、英語の教科書で英語で実践することの難しさは、前述した通り、批判の対象とする言語を使って批判するという自己矛盾にある。現に、*Creative* の I の見開きの 2 頁は、“English Speaking World” のタイトルの下に英語が使われている国を示す言語地図が載せられている。編者は、この言語地図も批判的に読み解く資料として提供しているのだろうか？ それとも、英語の拡大（言語の一元化）については様々な意見があるという事実を知らせたいという「バランス感覚」「中立主義」いや「なんでも主義」が背後にあるのだろうか？

しかしながら、以上の 2 本の英語言説は、Old English, Middle English, Modern English, American English を小見出しにした ‘A Short History of English’ (*Mainstream* II, [Revised Edition], 増進堂) よりはるかに優る。この課はまるで大学の英文学科で講義される「英語史」のミニ版という趣きであり、こんな知識に高校生がどれほど興味を示すか疑問だが、そもそも高校生にこんな英語史の「知識」が必要だとは思われない。この課の原典は、*The Holt Intermediate Dictionary of American English* である。この原典が悪いというのではない。それを高校生の読物として適切だと判断した教科書作成者の (R. フィリプソンが批判する) プロフェッショナルリズムを問題にしているのである。編集者のプロフェッショナルリズムが別の形で反映されたものに、‘A Man (=Shakespeare 筆者注) Who Made English More Expressive’ (*Royal English* II,

旺文社)がある。英語の変種としてピジン英語を扱ったものもある(Step II, 旺文社)。その延長線上に‘Crazy English’(Crown II [New Edition], 三省堂)と‘Flexible English’(Orbit [Reading, New Edition] 三省堂)がある。‘Flexible English’は、英語の力(a strength of English)について語ったもので‘Crazy English’や‘Pidgin English’の対極に立つ英語観に思えるが、前者がproper Englishを標準と捉える伝統的立場に立ち、後者が「脱(正しい)英語」「おぞましい英語」の立場に立っているだけで、英語教育そのものへの批判的な姿勢が欠如している点で、立場は本質的に変わらない。二つの立場は、‘English, English, Everywhere’(Access to English II [new edition] 開拓社)が、包み隠さず語っている英語観——英語の拡大は, natural, neutral で beneficial⁴¹⁾である——と本質的に変わらない。一見違って見えるのは同じ言語観を別のことば(CrazyとFlexible)で言い換えたところである。英語を、「共通語」「国際語」「普通語」「世界語」「汎用語」「地球語」「国際補助語」などいくら言い換えても、歴史に規定された英語の本質は変わらないのである。現行の英語教科書の中で、その本質を書いたものは、残念ながら数点にとどまる⁴²⁾。

(3) 「環境」問題の記号化：

『ニュー・クラウン』によって提起された「多言語主義」「多文化主義」は、戦後民主主義の基本的理念たる「自由・人権・平等」と関わる教材を生み出してきたことは、既に述べた通りだが、そうした教材の一つで、今日もっとも「人気のある」テーマが「環境問題」である。今日人々が強い関心を寄せる環境問題は、主流からはずれ(あるいは、はずされ)てきた社会的少数者(少数民族・障害者・老人・女性、等々)への関心の高まりと連動している。その意味で、環境問題への人々の関心は、戦後民主主義の理念(自由, 平等, 人権)が人々を運動へと突き動かした結果生じたものとみてよいだろう。実際、今日の環境問題は、先進国の国益になかった経済のグローバル化と軌を一にしている。「西側の先進国」対「途上国」という世界秩序を問題にしないで環境問題を論ずることはできない。この構図は、支配言語としての〈英語〉対〈地域言語〉という言語秩序と同じである。このような視点に立って環境問題を眺めれば、環境問題の扱いは、その問題のグローバル性と地域性が関連づけ

られるべきであって、それぞれが個々ばらばらにとり挙げられてもほとんど意味をなさない。今回の調査で分かったことは、その関連性はほとんど問題にされず、もっぱら日本国以外のところで起こっている環境問題を（しかも欧米人の立場から書いたものを）、読むように仕掛けられている。外国で起こっている問題を、自分たちの問題と結び付けて考えることができないような提示の仕方は、「環境」を単に記号化するだけで、問題の解決はおろか、問題の本質に迫ることなどできるはずがない。できることは、せいぜい環境問題の解釈である。ここにも、また悪しき「教養主義」がある。「環境」（エコロジー）は、今や「流行語」となり、それを使うことが「トレンドィー」なのであって、実体は何もない、ただの記号と化した。以下、そのような実態を、具体例を挙げて検証しておく⁴³⁾。

- (A) 「私たちの住む地球がますます汚れている。環境汚染の原因と解決を考えてみよう。」（‘Pollution is a dirty word’ ——*New Sunrise II* [Revised] 旺文社）

この課は、アメリカ人の手になるものである⁴⁴⁾。著者は、環境汚染の原因の一つを「人口爆発」にあるとして、次のように言う——， Part of the problem is our exploding population. More and more people produce more waste. But this problem is intensified by our “throwaway” technology. とり挙げられている原因はこれだけである。しかも著者がアメリカ人だから、とり挙げる具体例はアメリカの事例に限られる——， Each year Americans throw away 22 billion plastic bottles and 6 million plastic-encased disposal pens....Each year over 40,000 of them (discarded cars 中村注) are abandoned in New York City alone. 対策については、個人ができることをするしかないとした上で、例えば次のようにすべき、と述べる——， Check your car to see if the pollution-control device is working.

環境問題は、「グローバル」な問題であると共に「地域」の問題である。ここには、アメリカという「地域」だけが問題にされていて、それが日本の学習者とどう結びついているのか何も書かれていない。これを読まされる学習者は、環境問題を他人事としか捉えないだろう。ここに

もまた、教科書教材における「拝借主義」が生み出した編集者たちの歪んだ眼差しを読み取ることができる。環境問題を扱うのなら、学習者たちの住む日本をこそ問題にすべきだ。いったいどうして日本の問題を扱わないのか。理由は、日本の環境問題をきちんと扱っていくと、市場原理が支配する企業の問題にたどり着く。その先には、市場原理を支えている世界の経済システムがある。自らも市場原理の下に出版活動をする教科書会社が、そこまで問題にする作品を載せることは、返り血を浴びる覚悟が必要となる。日本における環境問題の本質は、「水俣」であり「薬害エイズ」である。それを真正面から扱うことは、教科書会社にとってタブーなのである。それは、天皇(制)の問題がタブーであるのと同断である。その結果は、日本の外で起こっている環境問題を意識的にとり挙げることになる。それがもっとも無難だからである。

以下、同じような例を挙げる。‘Are you green?’ (*English Street II*, 第一学習社) には、「Julia のクラスでは環境問題について討議することになり、まずみんながいろいろな事例を発表しました」という説明文がついている。「みんな」は、Julia, Tom, Nancy, Greg, Sue の5人である。写真として、どこの国のものか不明だが、「酸性雨の被害にあった森林」「火力発電所」のキャプションを付した写真とブルネイの「木材の伐採」、ペルーの「熱帯雨林問題」の写真が載っている。熱帯雨林問題は、「地球の温室効果」の問題と共に、人気が高く、‘Rainforest Destruction’ (*Oak English I*, 開拓社) や ‘Forests Are Disappearing’ (*Apricot II*, 文英堂) など複数の教科書が扱っている。しかし、いずれも、それが自分たちの生活とどう関わっているのか、突っ込んだ記述はない。まして、熱帯雨林の消滅は、日本人も共犯関係にあることなど、編集者にその意識がない限り、教科書教材に登場することなど、まず期待できない⁴⁵⁾。

(B) 「環境問題についてアンケート調査をもとに話し合う」 (*Interact*
[Oral Communication Course A] 桐原書店)

この課は、身近な環境問題を考えさせる教材であるが、こうした日本を基にして環境問題を扱った教科書は、*Talk Up* [Oral Communication A] 啓林館、など、ほとんど発信型の教科書に限られている。発信型だ

と、「借用主義」は通用しないからである。しかし、ここにも問題がある。前述の *Interact* には、アンケートの質問項目が5つ載っている。

1. How often do you save empty milk cartoons for recycling?
2. How often do you save aluminum cans for recycling?
3. How often do you bring back dead batteries to designated places?
4. How often do you bring your own shopping bags when you go grocery-shopping?
5. How often do you try to save water when you brush your teeth?

How often～などと質問されても困るが、問題の本質は、発信型の英語力をつけることを目的とした教材の英語のレベルが、ここに示された程度のものではないということだ。一部の（「帰国子女」などのような）既に相当の訓練を経てきた高校生は別として、一般的には、「環境問題」を突っ込んで議論ができるレベルに達してはいない。複雑な問題を低レベルのことで論じようと思えば、いきおい問題が単純化される。前述の How often～などという愚にもつかない質問に答える程度の教材を用意するしかない。この手の教材は、一步誤ると「植民地主義」的になる危険性を、ロビンソン・クルーソーとフライデーの対話を引用して論じたのはR.フィリップソン、A.ペニクックである。2人の対話を引用する――。

Master : Well, Friday, and what does your nation do with the men they take? Do they carry them away and eat them, as these did?

Friday : Yes, my nation eat mans up too ; eat all up.

この2人の対話について、A.ペニクックは、Not only does Friday not get to speak in his own language, but he has been given very particular English words to express his cultural background⁴⁶⁾ (大意:フライデーは自らの母語で話せないだけでなく、「人肉」を食するという)自らの文化

的背景について説明するのに〔アングロ・サクソンの立場で「食人の習慣」を表す〕特異な英語表現を身につけさせられたのである。) もちろん語学の習得の順序は、単純から複雑へ、易から難へ進むのが常道だ。しかし、この方程式を基本とする外国語の習得を学習者の全員に課した場合、その「動機づけ」が不十分な学習者にとっては、単純なレベルにとどまる言語習得が、長期的には知力、とりわけ創造性の発達に大きな障害となるであろう。複雑な問題を単純な言語表現で対応していれば、その問題が複雑であることすら気づかなくなる。幼稚な表現に長期間曝されれば、学習者の知能も単純で場合によっては、幼稚になる。中・高生の全員に習得を期待して作成されている今日の英語教科書では、環境問題を本格的に議論することができるようになるための課を用意することは不可能だ。高校生が環境問題を議論するのに、How often～程度の文章でしか対応できないとすれば、それこそ愚民化教育と言えるだろう。筆者が、今日の外国語教育政策が、根本のところ間違っていると主張する理由もここにある。

(4) 戦争・平和・憲法：

戦後民主主義の最大のテーマは、「平和国家」の建設であった。その理念を後押ししたのは、占領軍の対日政策であったが、自己否定を伴わないで、繰り返し生まれ変わることを「得意技」とした日本人自身が求めたものでもあった。「新生日本」は、実にあっさり1945年8月15日誕生した。その象徴が「国の交戦権は、これを認めない」と謳う憲法第九条である。「敗北を抱きしめて」再出発した日本人の「願い」は、「平和」ということばにいかんなく示されている。「平和」は、戦後民主主義の理念の絶対性を示す記号として使われ今日に至っている。ことばとしての「平和」が記号化する過程は、そのことばに対置される「戦争」(第二次世界大戦)を問いつめるのを忘却する過程でもあった。第二次世界大戦を問いつめることは、「平和」の実現になんの役にも立たないと考えているかのようにである。こうした日本人の心性は、英語の教科書にも見事に反映されている。以下その点を事例にそくして読み解いてみたい。

(A) 「人間の歴史で戦争のなかった世紀はあったのでしょうか。戦争

のもたらず悲惨さを知りながら、人間はなぜ戦争を始めるのでしよう。いよいよ21世紀。沖縄の慰霊碑からわれわれは何を学ぶべきでしょうか。」

—— ‘The Cornerstone of Peace’ (Orbit II, 三省堂)

今まで述べてきたことに矛盾するようだが、英語の教科書での「平和」教材は、「環境問題」などと比べるとはるかに少ない。その理由は、「平和」を扱えば「戦争」に触れざるを得ず、触れるとなると「暗い教材」となってしまうからである。暗部をくぐり抜けなければ、抱きしめてきた「平和」も実現しないはずだが、そうは考えない。「平和」「戦争」教材が必ずしも多くない理由は、英語の教科書は社会科の教科書とは違うという考え方があることだ。英語は使えるようにならなければ意味がない。それには、社会科のようなテーマは無用という考え方である。アングロ・サクソン（今日ではアメリカ）志向と英語有用論がドッキングすると、「平和」「戦争」などの重いテーマはお断りということになる。しかし、英語・アングロ・サクソン・世界秩序の三極構造を考えないで、無心に英語を教え学ぶ日本人の政治的無意識は、ほとんど絶望的ですからある。

そのように考えると(A)は、貴重な教材と言ってよい [資料(4)]。沖縄は糸満市の摩文仁の丘に建てられた「平和の礎」には、沖縄戦で戦死した20万人の名前が刻み込まれている。そこを訪れた元海兵隊員の一人は「どんなお気持ちですか」と尋ねられ、Touching a name on the stone he said in tears, “I don’t feel good at all. This was my best friend.” (石碑に触れながら、涙ながらに言った。愉快であるはずがないでしょう。彼は僕の親友だったんですよ。) また元兵隊は、‘... That war particularly shows how really stupid man can be.’ (とりわけ沖縄戦は、人間がいかに愚かになり得るかということを語っている) と言ったという。この課は、やわな教材であふれている英語の教科書の中では間違いなく輝いている。本土と沖縄の関係も考えさせるきっかけになるであろう。にもかかわらず、筆者にはこの教材の扱いに根本的な疑問がある。それは、長崎の原爆投下について書かれた ‘Under the Atomic Cloud’ (Powwow II, 文英堂) 「平和教材」の定番 ‘Anne Frank’ (English Pal II, 桐原書店), サラエボの内戦を扱った ‘The Diary of Zlata Filipović’ (English 21 I, 東京書籍) な

どの他の「平和」教材についても言える。戦争を扱って、それがどんなに理不尽でかつ非人道的かは、やはり次の世代に伝え、記憶しておくべきことである。しかし、大部分の「平和教材」がそうであるように、戦争の悲惨さを伝えるところでとまってしまえば、「平和」を抱きしめる心性を乗り越えることができない。「平和」は抱きしめるだけでは実現しないのである。それぞれの戦争が何故起こったのか、そしてその始末をどのように（当事国は）つけたのか——、その点を素通りして悲惨さだけを伝えても、その戦争の因果関係は少しも学習によって内面化されない。ただただ、「戦争は悲惨」という思いだけが残る。それが「平和を抱きしめる」心性につながって、「戦争」も「平和」も単なる記号と化す。「戦争」は絶対の悪であり、「平和」は絶対の善である。そうになると、「平和」と呼んでいれば、戦争はなくなりこの世の中は平和になると単純に考える人間が出てくる。逆説的だが、そこに、「平和」が「ファッション」に転化する構造がある。

そのように考えると、(A)は、戦争問題を日本人の問題として、とりわけ本土の日本人が沖縄を「日本の第三世界」として植民地化してきた歴史の中で起こった問題として考えさせる教材としては抜群の価値があることを認めた上で、沖縄戦と第二次世界大戦を、日本人がどのように始末をつけたのか、あるいはつけなかったのか、もしつけなかったなら、その理由は何か、を考えさせる展開にすべきだった。理屈っぽい展開になることは分かっている。しかし、そうしなければ「平和」の記号化を超えられない。「平和」という理念を「高らかに謳った」のは日本国憲法の第九条である。その第九条をとり挙げたのが *Raccoon II* (筑摩書房) である。次にそれを検討する。

(B) 'International law and the Constitution of Japan'

日本国憲法が英語の教科書に登場するのはこれが第1号である。非政治色を要諦とするこの国の英語教科書にあって、これは画期的なことと言ってよい。著者は、『ラディカル・デモクラシー』（岩波書店、1998）を著したC.ダグラス・ラミス氏であろう。その書物で展開されている日本国憲法論に比べると、この教材はかなり「穏健」である。国際法が、国の交戦権を認めているのに対し、日本国憲法は、その交戦権自体を認

めていない (...the right of belligerency of the state will not be recognized.)。ちなみに、「～とする」「～であるべき」「～であってはならない」を示す助動詞は、すべてshall (or shall not) であるが³⁴⁷⁾、ここ(第九条)だけwill notが使われている。このことは、この件についての「国民」の意志の強さを特に示しておきたかったからである。この課は、「国の交戦権」についての二つの解釈(①自衛権まで放棄したわけではないという立場と、②自衛であれなんであれ一切の武力の放棄を宣言しているとする立場)を並記した上で、次のように結論する。(なお、原文は二つの段落で構成されている。ここでは、便宜上一つにまとめてある。)

A constitution is, after all, a command by the people, telling the government what powers it has and what powers it doesn't have. If the people say in the constitution that the government has a right to use weapons in self-defense, then it does, and if they say it doesn't, then it doesn't. The debate over Article 9 has gone on for years, and will no doubt continue. In the end, it will be decided, not by how the words of Article 9 should be interpreted, but by what the people will. (大意：憲法は、政府にはどのような権限があり、どのような権限がないのかを、「国民」が政府に通告した、いわば、命令なのである。したがって、憲法で政府には、自衛のために武器を使用する権限があると書いてあれば、政府には武器を使用する権限があることになり、権限がないと書いてあれば、権限はないことになる。九条をめぐる議論は、もう何年も続いており、今後も続くに違いない。結論は、九条の解釈ではなく「国民」の意志によって決まるであろう。)

さて、憲法を「国民の政府に対する命令」と定義する一文は、主権在民を謳う憲法の理念を明確に示すものであるが、上から下りてくる天子のことば(勅語)に慣らされた日本人の憲法観をひっくり返すほど鋭く憲法問題の本質を突いている。異文化理解を標榜する英語教科書が、未だにイギリスのteaの習慣(*Unicorn II*, 文英堂, その他)やイギリスの地下鉄('Underground'—*New Step II*, 一橋出版), など、実はどうしてもよい風俗・習慣の違いを知らせることを異文化理解と思い込んでいる状況の中で、このような文化の本質(エートス)につながる素材は貴重であ

る。しかし、この課については、筆者には次のような批判がある。

批判の第1は、九条をめぐる解釈には、独立国家であるはずの日本が、アメリカに自国の防衛を任せておいて「平和」を論ずることの欺瞞性についてである。九条を真空状態で、単なるコトバの問題として論ずるのならこの課の二つの解釈で済まされる。しかし、憲法は単なる解釈の問題にとどまらない。戦後の「進歩的知識人」の九条論が決して説得的でなかったのはその点だった。この課は、その点には触れず、議論を二者択一的解釈に回収してしまって、事柄の本質を素通りしてしまった。批判の第2は、日本国憲法をとり挙げるのなら、憲法が、天皇を「象徴天皇」と規定することによって、天皇の戦争責任を免罪してしまった⁴⁸⁾ことがいかなる意味を持っているのかを書くべきであって、その点を素通りすることは、この教科書もまた戦後日本の最大のタブーに眼をつむったことになる。ただし、市場原理が支配する英語教科書が、そうしたタブーに挑戦したら何が起るか、編集者も十分承知していて、それを意図的に避けたとも考えられる。問題の核心を突くことのできない教科書が再生産される理由がここにある。環境問題に関心を示す教科書は、「平和」「戦争」という広義の環境問題に関わるテーマに及び腰であるのは、著者と出版社が「腰抜け」か、よほどの政治的無意識のどちらかだろう。さて、政治的無意識の教科書は、今日流行の「ジェンダー」問題にも少なからず関心を示している。次にその問題を取り挙げる。

(5) 社会的性(差)〔ジェンダー〕

男女の社会関係を示す「ジェンダー」は、それが片仮名語であることが何よりも、そのことばと概念がアングロ・サクソン文化に由来していることを示している。したがって、その点での「開化の途上」にあるこの国にあっては、ジェンダーに相当する適切なことばが見当たらないのである。概念として定着していない以上、教科書にもそれを真正面から取り扱ったものは少ない。

- (A) 「これまで男のものと思われていた職場に女性が進出すると、どんな問題が起きるだろう。思わず手助けしようとする男性とそれを断る女性。アメリカのある女性運送共同組合に所属している女性トラック運転手の手記を読んでもみよう。」(‘Woman Truck

Driver'—*Windmill* II [second edition] 筑摩書房)

- (B) 「性差別を社会からできるかぎりなくそうと努力する現代アメリカは、制度・習慣ばかりでなく、ことばも変えようとしている。この変化は何を意味するのだろうか——アメリカからのレポートを読んでみよう。」 ('To Be Fair to Women'—*Vista* I [new edition], 三省堂)

(A) (B)共に、男女の関係性を知るのは、「アメリカ・モデル」を通してである、と言っている。英語を学ぶことがアングロ・サクソン文化を学ぶ、という前提はここにも生きている。男女の関係性は、男女の組合せの数だけ存在する。そのような状況でアメリカだけを比較の対象とするのはどういうわけか。アジア、アフリカ、あるいはイスラムではとてもモデルにはなり得ないということだろうか。

男女の関係性を扱う場合、男女の役割の固定化が批判の対象になりがちだが、男女の性質そのものに眼をつけた 'Women as Peacemakers' (*New Step* II, 一橋出版) は、教科書の中の固定的な西洋モデルに反省を迫るものである。その前文は次の通りである——。

One Greek woman from Cyprus once said, "Women have special talents as negotiators. We need to take our destiny in our hands, and not leave it solely in the hands of men." In fact, in some regions of conflict, women from both sides meet secretly, or sometimes openly, to talk about their common concerns and to find a way to end hostilities.

(大意: キプロス出身のギリシャの婦人がかつて次のように言った——「女性は調整役として特別の能力を持っています。だから自分たちの運命は自分たちで切り拓くべきで、すべてを男たちに任せるべきではありません。」
実際、紛争が起きているいくつかの地域では、両方の側の女性たちが、私的に、あるいは公式に、自分たちに共通の関心事を話し合い、結果として紛争解決の糸口を見つけることができたのです。)

この後に、英国軍が北アイルランドに常駐するきっかけを作った、プロテスタントとカトリック教徒の激突 (1969年) の際に女達が調停役と

して果たした役割を描いた本文が続く。女性の差別はあってはならない。しかし、夫婦が別々の姓を名乗れば差別がなくなるというものでもない。男と女のそれぞれの 'special talents' をどのように活かすべきかも同時に議論の対象にすべきものと思う。

ジェンダーを扱う英語の教科書には、英語の中の差別用語を扱ったものが多い。教科書の作成者が英語のプロだからである。例えば次のような説明文で始まる課が典型である。

- (C) 「結婚した後でも姓を変えない女性が増えています。男女平等の意識が世界的に高まるとともに、その運動が言葉にもさまざまな影響を与えてきました。英語ではどんな例があるのでしょうか。」
('Sexism in English' — *English Now* I, 開隆堂出版)

その他、'Sexist Language' (*One World* [Reading] 教育出版), 'Language of Men and Women' (*Oak* II, 開拓社), 'Sexism in Language' (*Phoenix* II, 開隆堂) などであるが、扱う内容は共通していて、fireman → fire fighter, mailman → mail carrier, policeman → police officer といった (ここでもまた) アメリカにおける例が挙げられている。少しレベルが高くなると、*If anyone wants a copy, he can have one.* に対して次のような解説が載っている。No natural-sounding alternative exists: *one* is considered very formal, and forms such as *he or she* are awkward. As a result, there have been many proposals to introduce a new English sex-neutral pronoun — including *tey, co, E, heesh, hesh* and *person*. None of these proposals has attracted much support. Instead, *they* has been increasingly used. (大意: *he* に代わる代名詞で、耳障りでないものがない。例えば、*one* ではあまりにも形式ばっている。he or she では不自然だ。そこで、「性中立」系の新しい代名詞が多数提案されてきた。例えば、*tey, co, E, heesh, hesh* それに *person* などである。しかし、どれもあまり支持されないまま今日に至っている。今日では、それに代わって *they* が盛んに使われるようになった。)

ことばを変えれば差別がなくなる、と考えるのは、言語決定論 (linguistic determinism) だと厳しく批判するのは、M. ホルボローである⁴⁹⁾。「ことばの言い換え」は、差別を地下にもぐらせるだけ、という批判も

ある。英語の中の女性差別を扱うのなら、単なる言い換えに関心を集中するのではなく、アングロ・サクソン文化の中の女性差別が、どのようなプロセスででき上がってきたのかに触れるべきである。前掲の 'Sexist Language' の冒頭の説明文は、「英語はある意味で男性優位の言語である」で始まる。H. ワイルドの英語の標準語論⁵⁰⁾を引用するまでもなく、英語の標準語は、男性の話す言語であって、女性の言語ではなかった。いったい女性はどうような過程で、アングロ・サクソンの主流 (mainstream) から排除されてきたのか。言語 (言説) は社会状況を反映する。したがって、英語の中の性差別用語に関心を向けることは、それ自体間違っていない。しかし、議論がそこで終わってしまえば、「言い換え」によって問題が解決すると考える「言語決定論」のわなにはまる。(C)系の題材の危険性はそこにある。

(6) 広告——消費社会のシンボル：

「美香は休暇中にイギリスで英語の勉強をしようと考えています。下の2つの広告を見て、次の問いに答えなさい。」(Genius, [English Readings] 大修館書店)

上の説明文は、本文とは別に 'English for Everyday Life' のタイトルの下に用意された(10)種類の素材の冒頭のものである。まず広告そのもの(次頁)を示す——。

美香はこの広告を読んで(1)、申込み用紙をとり寄せそれに書き込んで送る(2)。美香は、イギリス行きの準備をする(3)。以下、イギリスでの美香の学校生活が語られる。(4) Stratford-upon-Avon 行きのバスの「時刻表」、(5)学生課 (Student Service Office) の案内書、(6)課外活動の予定表 (Social Activities Programme)、(7)チョコレート・ムースの作り方、(8)レストランのメニュー、(9)①国際電話のかけ方および②公衆電話の使い方、(10)Oxford の Tourist Information Center で手に入る地図。

実際的な素材で問題はないように思われる。しかし、これほど危険な素材はない。第1に、これからイギリスに出掛けることになっている学習者を主たる対象とした素材なら、その意図は分かる。例えば、イギリスに社員を送り出す企業内教育のプログラムの一つというのなら通用す

Learn English in Coventry

- courses in English language throughout the year—all levels, all ages
- students may commence their course at the beginning of any week
- accommodation in selected private English families
- 1-8 p.m. : students can use sports facilities
- classes : Mon -Fri Everyday
- hours : 9:00 a.m. - 3:00 p.m.

The School is situated in a quiet park, five minutes walk from the City Centre.

Coventry is a small, interesting city in the heart of England.

Most places of interest are within easy travelling distance.

e.g. LONDON	1 hour 15 minutes (by train)
OXFORD	1 hour 40 minutes (by road)
STRATFORD-UPON-AVON	30 minutes (by road)

For further information please cut out and return to: The Director, Coventry English Studies

NAME

ADDRESS

.....

.....

.....

ENGLISH

in

SMALL CLASSES

in STRAWBERRY GARDEN

Strawberry College London



- In small groups of 5 to 9 and / or individual tuition
- From beginners to University of Cambridge Proficiency
- Students aged 16-18 can find suitable classes
- Situated in Strawberry Garden near the Opera House
- Strawberry College enjoys an international reputation for excellence and efficiency

Class: Mon, Weds, Fri
or Tue, Thur, Sat

Hours: 9:00 a.m. - 3:00 p.m.

071-000-0000

る。この教科書を使うすべての学習者が、将来イギリスへ行くわけではない。実際的な教材を標榜するなら、アメリカをとり挙げた方がよほど現実的だ。いや、ねらいはそういう実用的観点にのみあるわけではない、とするなら、英国の社会生活の一端に触れさせるのが目的の一部とまではずだ。もしそうだとすると、(8)に載っているレストランのメニューを見て、Which dishes would you like to order? a. What would you like for the starter? b. What would you like for the main dish? c. What would you like for the dessert? と答えさせることにどんな意味があるのだろうか。この素材が、(イギリス体験のある学習者は別にして)多くの日本の学習者にとってはほとんど現実性を持たない。そのような問いがいかになんセンスかは、日本語をイギリスで勉強していて、日本食を食べたことのないイギリスの学習者に、「納豆を食べたいですか、それと

もコンニャクを食べたいですか」と問いかけることが、いかに現実離れたものかを考えれば、すぐ分かる。それは、イギリスのお茶の習慣をいくら教えても何の意味も持たないのと同じである。『パーレーの万国史』の世界に逆戻りしたような錯覚を起こす。こうした教材がまかり通るのは、未だに英語教科書の作成が「イギリス大好き」の著者によって書かれていることを物語っている。

「イギリス（アメリカ）大好き」の著者たちが、イギリスの英語学校にのみ関心を持つのは当然だとしても、英語を商品として売り出している英語学校の広告を全員履修を建前とする教科書に載せることの意味について何の疑問も持たないとなれば、著者たちの政治的無意識は、問い直すだけの価値があるように思われる。英語学校は、英語を商品として売っているから、学校の広告を出すのである。この教材の最大の問題点は、英語が商品（あるいは経済的資本——economic capital）であることを前提にしていることである。「批判的教育」では、その前提がまず問われなければならない。しかし、広告というメディアは、売り込むための効果的な技術に関心があつて（‘TV Commercials: How are they made?’ — *Spectrum* II, 桐原書店）、広告それ自体の意味を問うことはない。英語学校の広告の意味を問いかけていては、広告自体が成り立たないのである。まして商品としての英語が、どのような経緯で、高価な商品となったかについて問いかけることはしない。物の交換価値は、しばしばその物の本質的価値とは無関係に、社会的に決定される。言語のような手にとって見ることのできない商品の価値は、消費社会（commodity-intensive society⁵¹）においては、社会関係においてのみ決定される。英語がアングロ・サクソンによって世界の「支配言語」の地位に押し上げられなかったら、英語は、「経済的資本」や「象徴的資本」にはなり得なかっただろう。言い換えれば、英語がもっとも売れる商品となったのは、商品としての他の言語との競争に勝利したからである。売れる物にとびつく心理は、consumerism (*Unicorn* II, 文英堂) そのものであつて、そうした消費行動が、社会関係の中でいかなる意味を持つかは、問われることはない。このように考えると、商品としての英語の広告は、化粧品やクルマの広告と、その本質において変わるところがない。要するに、広告は消費社会のシンボルなのであつて、広告が表象する世界は、しばしば広告される商品の本質を隠蔽する。そのことに触れるのでなければ、

「広告」は教科書教材として不適當であるだけでなく、有害ですらある。

(7) その他

以上のほかに、日本の英語教科書の特徴づけるいくつかの点について触れておく。その第1は、儒教の影響を受けた「修養主義」系の題材である。例えば、「生きがいの感じられる人生を送りたい。あなたにとって生きがいは何でしょうか」を説明文として載せた‘What is Most Important to You?’ (Orbit II, 三省堂) や、クーベルタンの「その人が成功したかどうかを決める目安は、勝利者であるかどうかではなくて、努力をした人であるかないかである」を前文に掲げた‘Do your best while you can’ (Powwow I, 文英堂) などが典型である。「平凡だがこれ以上の真理はない。それは、金で幸福は買えないということだ」(‘Trite but True — Money can’t buy you happiness’) など、キリスト教文化の中の「禁欲主義」を、日本文化の文脈の中で儒教文化で読み替えたと考えられるものが多い。こうした「修養主義」は、人物論にも及ぶ。例えば M. ガンジー (Powwow [Reading] 文英堂) である。その課の副題は‘A Simple Man with a great Soul’ 「豊かな心で質素な生活を信条とする一人の人間」である。伝統的な日本人を支えてきた生活信条とぴたりと一致する。「身障者」への関心も高い。「スウェーデンのゴスペル歌手レーナ・マリアさんは、重度の障害を負って生まれてきました。しかし、彼女はそのまま明るく歌声のように、のびやかで楽しく好奇心いっぱい

の生活を送っています」は、‘Lena Maria’ (English Now II, 開隆堂出版) の紹介文である。この課のメッセージは明白である。両手のない少女でさえこれだけ頑張っているではないか。健常者のあなたにできないことは何もない、と激励しているのである。このように、「修養主義」を通して、身障者を眺めることの危険性は、問題を身障者個人の生き方に閉じ込めてしまっ

て、そのような障害を生み出した社会的要因にまで眼が届かないことである。身障者問題を単なる「美談」や「感動物語」に仕立て上げて、障害者には何のためにもならない。

英語教科書の人物論の定番ともいべきキング牧師は、相変わらず複数の教科書がとり挙げているが、新しく登場したのがネルソン・マンデラ (‘Freedom Is Coming Tomorrow!’ — Polestar I 数研出版, Sunshine I, 開隆堂出版など) である。いずれも、人種問題への関心を反映したもの

だ。こうした政治性の高い教材として、*New Cosmos II* (三友社出版) が、C. チャプリンをとり挙げ、最後に 'The Concluding Speech of the Great Dictator' を載せている点は注目してよい。風刺を武器に「独裁者」を徹底的に批判した演説は、日本人の演説にはみられないほどの強烈な〈毒〉を含んでいる。比較文化の素材としても逸品である。それとは対照的なのが、*Lingua-Land II* [Revised Edition] (教育出版) の 'Captain James Cook' である。説明文は、「キャプテン・ジェームズ・クックが2度目のハワイ諸島訪問をし、ハワイ島に立ち寄ったのは、1779年1月のことでした」で始まる。こうした時代錯誤的「探検」観が未だに生き延びていることに驚きを禁じ得ない。それは、コロンブスの「アメリカ大陸到達」に何の留保もつけずに、「発見」という用語を与えてきたこの国の西洋中心的イデオロギーが、したたかに生き延びている (die hard) ことの象徴である。

ところで、環境問題に大きな関心を寄せる英語教科書が、重大な社会問題であるはずの「老人問題」にほとんど関心を示していない。私の目に留まったのは、1989年に *Japan Times* に載った遠藤周作の 'Society Now Shuns the Aged' を 'The Aged and Society' (*Active English* [Reading] 一橋出版) というタイトルに書き改めたものである。その中に次のような一節がある——, In short, the aged are no longer honored. They are on the edge of being forgotten, not on the boundary between this world and the next. Instead of respect young people look on old age with disrespectful pity, (大意:つまり, 老人は尊敬されていないのである。老人は忘れられようとしているのであって, この世とあの世の境界に居るわけではない。若者は老人を尊敬する代わりに, 小馬鹿にしたあわれみの気持ちをもって見ているのである。)

遠藤周作の幾分シニカルで〈痛切な〉気持が十分に伝わってくる内容だが, それを若い世代がどのように受け止めるかは, おのずと別問題である。大人の立場からでなく若い世代の目線で書かれたものの方が受け入れられやすいかもしれない。

さて, 最後に一言付言しておきたい。「多言語・多文化主義」を標榜する70年代以降の教科書は, 戦後民主主義の理念を核にして, 戦前の教科書よりはるかに多様なテーマを扱うようになってきている。そこから起こる英語をめぐる「自己矛盾」については既に述べた (p. 42) が,

もう一つの問題は、題材間の一貫性のなさである。ここではその典型を三つ挙げておく。(A) *Unicorn II* (文英堂) は、'Halloween' と 'Nelson Mandela' が連続して載っている。(B) *Fresh English II* (第一学習社) では、'Protecting the Environment' に続いて 'Enjoy Your Homestay' が載っている。題材の非連続性は、ほとんど '分裂病' 的としか言いようがない。(A) では、アメリカのお祭り気分を味わった学習者は、翌日には一気に気分転換をはかって、反人種差別運動の象徴的人物伝を読まされる。(B) がホーム・ステイを異文化体験の一つと捉えているのは、それ自体異論はない。しかし、そこに写っている2枚の写真はいずれも白人の家庭である。したがって、You will have more chances to use the language of your host family. の中の language は、英語 (その他の西洋大言語) を指していると大部分の学習者は解釈するだろう。編集者たちは、こうした homestay が広い意味の「環境破壊」に加担していることに気がついていない。(C) *Vista II* [new edition] (三省堂) は、reading の教材として 'A Boy Who Fought Aids' をとり挙げている。素材自体は社会性の高いもので、とり挙げることに異論はない。しかし、このような、当事者にとって生死に関わる教材のカテゴリーを示すタイトルとして Enjoy Reading! とあるのは、いくらなんでもひど過ぎないか。思うに、編集者にとっても教科書作成者にとっても、AIDS は、彼等の身体から遠く離れて存在する単なる記号でしかないのである。このような分裂的、あるいは政治的無意識を示す教材は、『ニュー・クラウン』から始まった「多言語・文化主義」を標榜する現代の英語教科書の〈病理〉を示しているであろう。では、どうしたらよいか。最後にその問題を含めて本論文の総括をしておきたい。

4. 総括

(1) 英語の教科書は、ごく大雑把に言って戦前と戦後の2期に分けることができる。戦前は、P.Parley's *Universal History* や *Wilson's Readers* などの直輸入のテキストが使われはじめた1860年代以降、第二次大戦が終結した1945年までを指す。戦後は、1945年以降今日 (2001年) までを指す。したがって、英語教科書史は、厳密には1世紀半に及ぶ期間を指す。戦前と戦後の教科書に共通する特徴は、戦前までは、英語を学

ぶことはアングロ・サクソンの母語を学ぶことであるという「公理」があった。したがって、英語を学ぶことは、アングロ・サクソンの文化を学ぶことと同義であった。その結果、題材はアングロ・サクソン文化が中心であってアジア・アフリカなどはほとんど登場しなかった。英語は、アングロ・サクソン民族の言語、つまり、英語はなによりもまず民族語であって、今日のような世界の「共通語」という意識を、英語の教科書が明確な形で表現することは一般的でなかった。ただし、「万国法」と同じように、大言語としての英語を言語における「世界基準」(world standard)と、為政者たちが意識していたことは、福沢の「これから以後はいっさい万事英語」(『福翁自伝』1899)ということばに表わされている。

戦後の50年は、「英語＝アングロ・サクソンの民族語」というそれまでの「公理」が絶対でなくなる過程である。その公理は、今日までしぶとく生き延びてはいるが、今やその公理を無化するほどの力を持った「英語＝世界語」という公理が登場し、グローバル化する世界システムを言語の面から支えている。こうした言語状況は、英語の教科書にも色濃く反映し、「何故英語を学ぶのか」という日本の学習者が一度はぶつかる疑問に対し、英語の教科書は判で押したように、この「公理」を持ち出している。もちろん、この「公理」の正当性について論じている教科書は一つもない。理由は、英語の教科書も、世界システムを支える「市場原理」に支配されているからであり、しかも絶望的なのは、「市場原理」に抗して何が(教科書で)できるかを問うところから教科書の改革が始まるはずだという認識が、教師・教科書作成者・出版社によって共有されていないことである。

そうした認識が育たないのは、既に繰り返し指摘してきた通り、戦後の日本の国際関係が、アメリカとの〈親密な〉二国間関係であったことと無縁ではない。それは、第二次大戦の「敗北」から始まった。J. ダワーは、敗戦後総司令部に「押し寄せた」日本人の手紙の中の一文「昔は朝な夕なに天皇陛下のご真影を神様のようにあがめ奉ったものですが、いまはマッカーサー元帥のお姿に向ってそうしております」に言及しつつ次のように言う――。

マッカーサーは、この時代の偉大な愛の化身であった。彼ら(日

本人、中村注)は手紙のなかで、まるでお守りのように平和と民主主義という言葉をくり返し語っていた。マッカーサー最高司令官は、その侵しがたい権力のゆえに天皇のような存在であったが、彼の方が天皇より近づきやすく、より直接的に関係をもつことができる存在として慕われていたことも明らかであった。民主主義を約束する権威主義的な支配という逆説に満ちたころみがここに始まったのである⁵²⁾。

「民主主義を約束する権威主義的な支配という逆説」に満ちた占領政策は、日本人の天皇イデオロギーを逆手にとって、日本人を飼い馴らしてしまった。アメリカは、日本人の天皇観を知り尽くしていたのである。植民地支配は、下からの「植民地主義」への協力と「自発的同意」があつて、成功するのである。アメリカの占領政策が成功したのは、日本人がそれに協力したからであった。その協力の一つが英語教育であつた。検定教科書 *Jack and Betty* が表象する世界は、「天皇であるマッカーサー」に象徴される平和と民主主義の国アメリカである。*Jack and Betty* は、理想の国のアメリカの謂であつた。日本人にとって、アメリカを代表するのは、大統領ではなく、マッカーサーであつた。こうしたマッカーサーの権威は、彼の母語である英語に「象徴的権力」(symbolic power)を与え、日本人にとって英語はワン・ノブ・ゼムの言語ではなく民主主義の言語であり未来を拓く輝かしい言語となつたのである。日本において、英語を話す「白人のネイティヴ・スピーカー」が、格別の意味を持つのはそのためである。「天皇」「マッカーサー」「ネイティヴ・スピーカー」という構造は、日本人にとっての英語の意味を規定してきた。筆者は、英語の第二公用語論は、深層のところで天皇信仰と結びついていると主張する者であるが、理由は日本人のアメリカ崇拝(英語崇拝)が、マッカーサー崇拝を経由して天皇崇拝にたどりつくからである。現在の英語教科書の方向性は、英語有用論一色に染められているように思われがちだが、むしろ、マッカーサーに象徴される戦後民主主義の理念をどのように学習者に伝えたらよいか腐心しているのが実態だと思われる。英語の教科書の中で展開される戦後民主主義の理念は、修養主義と共通項を持っているために、我々は、そうした理念が深層のところで英語の権威と結びついていることを見逃しがちである。

以上のようにみてくると、戦前と戦後の英語教科書の中身は、本質のところで変わっていないということになる。戦前の中心的題材はアングロ・サクソン文化であった。たしかに、戦後になって、「多言語・文化主義」の名の下に、そのものずばりの、つまりコテコテのアングロ・サクソン文化（風俗・習慣）がとり上げられる機会は少なくなった。しかし、姿・形は変わっても、アングロ・サクソンの文化と歴史に規定された英語を表現手段とする限り、英語のアングロ・サクソンの特質を消し去ることは、結局できないであろう。つまり、英語の教科書は、どんなに「多言語・多文化」を志向しようと、アングロ・サクソンの軛から脱することはできない、と考える。この論文は、そのことを、現在使われている英語の教科書を読み解くことで証明することができたと思う。

(2) もし、英語の教科書が、森有禮がデニングに書かせた教科書のように、すべての背景をローカルにしたとしても、なおアングロ・サクソンのことをまぬがれないとすれば、すべての英語教科書は結局アングロ・サクソンの文化を教えるために作られていることになる。言い換えれば、中学校からほぼ全員の生徒に英語を習得することを義務づける現行制度の下では、全員の学習者がアングロ・サクソンの文化を学ぶことになる。この問題をどう克服するか――。

二つの方法がある。一つは、外国語科目の全面的自由化である。英語をワン・ノブ・ゼムにしてしまうことである。もう一つは、現行制度を維持するのなら、英語教育を全面的に「批判的教育」の実践の場にしてしまうことである。目下のところこれ以上の解決策は見つからない。以下理由を述べる。

まず、第1の方法について――。このように提案するのは、この国の英語教育にあって、英語が身体から離脱して、極度に抽象化したものとなっている状況から一刻も早く抜け出すべきだと考えるからである。日本人の身体から英語が離脱する時期は、英語をそれ自体として学び始めた明治30年頃からである。英語を学ぶ対象が、英語自体（あるいは、英語・文学・文化）にある限り、英語自体に興味を持てなければ、英語を学ぶ理由がなくなる。『ニュー・クラウン』（三省堂）をきっかけにして始まった、戦後民主主義の理念の教科書への導入も、英語を学ぶための動機づけのためであって、戦後民主主義の理念をきちんと体系的に理解しようとするためではない。まず最初に英語があり、そして次にその英語

を使って何かを理解する、というのが、「教養主義」が主流となって以来今日まで綿々と続くこの国の学校における英語教育の理念であり方法である。筆者の提案は、この流れを逆転させようというものである。事柄の本質がまず最初にくる。次にその本質を知るための手段（言語）がくる。学習者にとって知りたい本質とは何か。それは学習者自身が決めるしかない。学習者にどうしても知りたい事柄がない場合は、知りたい事柄が出てくるまで待つしかない。どうしても深く知りたい、そのためなら身体を投げ出しても構わない、という状況が生まれれば、それを知るための手段はいやでも身につくものなのである。高山右近は、キリスト教の本質を知りたいという動機に突き動かされて、ラテン語もポルトガル語も身につけたという。そうした強い動機を学習者の全員に期待することは無理だ。右近のように、本質と手段が一体になった時に、手段であることば（外国語）が、その人の身体の一部になるのであり、押しつけられた理念を押しつけられたことばで理解することは不可能である。学習者に知りたい本質がなければ、その学習者にとって、目的のない手段の獲得は、無意味であるばかりか、ただの苦痛である。大学のカリキュラムの一つに「原書講読」というのがあった（今もある?）。担当者から出てくる苦情の一つは、「語学教育をもっとしっかりやって下さいよ。今の外国語の力では原書講読が成り立ちません」というものだが、これこそ本末転倒というものだろう。「原書」を通してその事柄の本質を知りたいという欲求が学習者の側にあれば、学習者はどんなに苦労しても、本質を知るための手段を身につけるものである。手段を身につけるのは面倒だというのであれば、その学習者の本質を知りたいという動機は考慮に値しないということになるだろう。この方法を採用すると、それに付随して起こる問題があるが、ここではそれに立ち入らない。ただし、入試科目から外国語を外すことになる、ということだけは指摘しておきたい。ことば自体の習得が優先する限り、そして全員に外国語の習得を義務づける現行制度を維持する限り、どんな方法論も不毛である。

第2の方法について――。

「全員に外国語の習得を義務づける現行制度を維持する限り、どんな方法論も不毛だ」と書いた直後に、「現行制度の下でどうするか」を書くのは自己矛盾である。それを承知で書くのは、現行制度は、この国の多くの人の外国語認識と国家の言語政策を考えると、半永久的に維持さ

れるだろうと考えるからである。以下の提案は、そうした制度自体を逆手にとって、制度そのものを空洞化、あるいは無化させようとするものである。

方法としての「批判的教育実践」(critical pedagogy)は、とり挙げる素材を徹底的に批判的に読み解く能力をつける方法である。本論文自体がその実践的モデルを目指したものであるが、批判の対象の一つは、英語そのものである。その仕事の一つは、英語国際語論をはじめとする英語をめぐる言説の欺瞞性を、英語拡大の歴史をたどることにより、明らかにすることである。その場合、英語の構造や意味の変化をターゲットとするいわゆる「英語史」は、ほとんど実効性を持たない。例えば、既に一度とり挙げた *This is the age of new Englishes*. ('The Story of English'—*New Crown*, 三省堂)の社会的意味は、伝統的な分析の枠組では、解明できない。しかしながら、この方法の問題は、「批判的教育実践」が、学習することの楽しさを奪いかねない点にある。とりわけ今日のように、「楽しい」ことがすべてに優先する時代には、「批判的教育実践」は、時代の風に逆らっているだけに決して容易ではない。まして、「英語国際語」論が常識化^{ヘゲモニー}している時代にあってはなおのことである。

本論文の一つの目的は、英語教科書を総合的に読み解くことによって、伝統的な英学史方法論に一石を投ずることであった。英学史は、「英語を学問とした」ことの意味から問い始めるべきであり、英語をめぐる歴史上の一見何の問題もないようにみえる「事件」や「事実」(例えば、一介の漁師 [ジョン万次郎] が、英語と出会うことによって「大学教授」になったこと、あるいはお雇い外国人の給与と日本人教師の給与の格差 [それは現在でも厳然と存在する], 等)が、現代日本の社会問題とどのような関連性があるのか、それを解明してこそ英学の歴史が生きてくる。本論文は、そのような問題意識の下に、中学校および高等学校の英語の教科書の諸問題を、現代のわれわれの問題として捉え直す試みであった。なお、大学の英語教科書はもっとひどい。ほとんど絶望的ですからある。次の論文(3)では、その問題をとり挙げる。

注

- 1) 『中日新聞』2001年5月6日付朝刊。
- 2) 寺島実郎氏は、20世紀の日本の外交が、本質的に、アングロ・サクソン

との二国間関係であったと、『一九〇〇年への旅』(新潮社, 2000)で述べている。21世紀に日本が生き残れるかどうかは、この関係を多国間関係にシフトできるかどうかに関わっている、というのが寺島の主張だ。

- 3) 井上能孝『箱館英学事始め』(北海道新聞社, 1987)。
- 4) 小林亥一『文久三年御蔵島英語単語帳』(小学館, 1998)。
- 5) 高木仁三郎『原発事故はなぜくりかえすのか』(岩波新書, 2000)。
- 6) 田中克彦『現代言語学の「不幸」』(『毎日新聞』1987年3月27日付夕刊)。
- 7) J. Honey: *Language is Power*, Faber and Faber, 1997, p. 253.
- 8) R. Phillipson: *Linguistic Imperialism*, Cambridge University Press, 1992.
- 9) A. Pennycook: *English and the Discourses of Colonialism*, Routledge, 1998. M. Holborow: *The Politics of English*, Sage Publications, 1999.
- 10) D. ラミス『イデオロギーとしての英会話』(『展望』筑摩書房, 1975年2月号)。なお、この論文については、B. B. Kachru がとり挙げている——‘Past Imperfect: ‘The Other Side of English in Asia’ in L. E. Smith & M. L. Forman (editors): *World Englishes 2000*, University of Hawaii’ and the East-West Center, 1997.
- 11) 中村 敬『英語はどんな言語か』(三省堂, 1989)。
- 12) 三浦信孝・糟谷啓介編『言語帝国主義とは何か』(藤原書店, 2000)。
- 13) イ・ヨンスク『「国語」という思想』(岩波書店, 1996)。安田敏明『植民地のなかの「国語学」』(三元社, 1998)。
- 14) 図示すれば次のようになる。
 - (A) 西洋大言語 (例えば英語)
 - (B) 日本語
 - (C) [日本国内の「異言語を含む」近隣諸語(拙稿「激動の70年代を迎えて」『英語教育』大修館, 2001年10月号参照)。
- 15) 伊藤比呂美「スリー・りろ・ジャパニーズ」(『新潮』2001年7月号)。
- 16) B. B. Kachru: *The Alchemy of English*, University of Illinois Press, 1990. / *The Other Tongue — English across Cultures* (edited by B. B. Kachru), University of Illinois Press, 1982.
- 17) その他の書名については、拙稿「英語教科書の1世紀(1)」(『成城文藝』No.173) 参照。
- 18) 『アエラ』(2001年4月30日号)は、「日本人はみな Yankee 化」を載せている。Yankee 化は、第二次大戦の敗北と共に始まった。
- 19) J. ダワー (三浦陽一・高杉忠明・田代泰子訳)『敗北を抱きしめて』(上)(岩波書店, 2001, p. 222)。
- 20) *Apricot* (文英堂)
- 21) J. ダワー『敗北を抱きしめて』(上) p. 222.
- 22) 安野光雅・大岡信・谷川俊太郎・松居直編『にほんご』(福音館書店, 1980)。書名が「にほんご」であって、「国語」でない点に注意。
- 23) 高田里恵子『文学部の病い』(松籟社, 2001)。

- 24) 斎藤美奈子「独文系「男性同盟」にみる精神史」(『文学部の病い』の書評, 『朝日新聞』2001年8月26日付の朝刊)。
- 25) 同上。
- 26) 宮崎芳三『太平洋戦争と英文学者』(研究社出版, 1999)。
- 27) もちろん, 石堂清倫のような人物がいたことも忘れてはならない。「1945年敗戦の混乱の中で, 満州(現・中国東北部)にのこされた日本の知識人が, ソヴィエトについたり, それに反撥したり右往左往する状態を見せる力を彼はもった。その時その場だけでなく二十世紀の終わりまで, 国家権力に弱い日本の知識人のあいだにあって, 明晰に現代を見渡すまなざしを石堂清倫は保ちつづけた」—鶴見俊輔「失敗から学ぶ明晰な思索力」『朝日新聞』2001年9月6日付朝刊)。
- 28) 拙稿「英語教科書のイデオロギー」(拙著『外国語教育とイデオロギー』近代文藝社, 1993)。
- 29) R. Phillipson : *Linguistic Imperialism*, Cambridge University Press, 1992.
- 30) J. Honey : *Language is Power*, Faber and Faber, 1999.
- 31) これは R. フィリップソンの用語。R. Phillipson : *Linguistic Imperilism*, Cambridge University Press, 1992.
- 32) F. ファノン(海老坂武・加藤晴久訳)『黒い皮膚・白い仮面』みすず書房, 1981。特に第一章「黒人と言語」(pp. 25-39) 参照。
- 33) A. Pennycook の一連の著作。特に *Critical Applied Linguistics*。
- 34) A. Pennycook : *English and the Discourses of Colonialism*, Routledge, 1998.
- 35) M. Holborow : *The Politics of English*, Sage Publications, 1999. ホルボローの議論を読み替えると次のようになるだろう——。
- (A) Discursive practice→artificial→vertual→mental →reality/system
- (B) Labour/production→natural→real →physical→reality/system
- (A)(B)共に reality を創り出すが, その質が違う。(A)は, もっぱらことばによって創出されたもので身体から遊離したものであるのたいし, (B)は, 労働や生産様式によって創り出されるもので身体的であると言える。問題は, (A)か(B)かの二者択一ではなく(A)(B)をどのように止揚するかにある。英語問題の一つは, 記号化した「英語」をどのようにしたらトータルに捉え直すことができるかにある。その際, ホルボローの議論は有効性を発揮する。
- 36) 本多勝一『殺される側の論理』朝日新聞社, 1983。
- 37) 出典 : Jon Miller : “English—A Question of Philippine Identity” in *Cross Section* (Kozo System, Spring, 1992)。
- 38) 根を断たれた人種
- 教育を植民地化政策の道具として使おうとする計画の中で, 最初の強力な一撃は, たぶん, 英語を指導の言語として採用する決定であったろう。英語こそ, フィリピン人をその過去から切離したくさびであり, さらに後

には教育あるフィリピン人を同胞大衆から切離すくさびとなった。英語はフィリピン人を奇妙な新世界へと導いた。フィリピン人は、アメリカの教科書によって新しい言語だけでなく、新しい生き方、自分たちの伝統とは異質であるがお手本を漫画風になぞった生き方をも学び始めることになった。これは同時にえせ教育の初まりでもあった。かれらはもはやフィリピン人としてではなく、植民地住民として学習したからである。善良な植民地住民になるのであるから、民族主義の目標からは解体分断されねばならなかった。理想的な植民地住民とは、征服者の忠実な複製であり、新支配者の大勢順応的な追随者であるはずだった。こうした人間が植民地秩序の下で、安楽にはないまでも平和に暮そうとすれば、過去を忘れ身についた民族主義の諸理想を忘却しなければならなかった。新しいフィリピン人世代は、アメリカ人英雄の事蹟を学び、アメリカの歌を唱い、雪とサンタクロースを夢みた。サカイ将軍を一例とする民族主義抵抗運動の指導者は、山賊、無法者と見做されるようになった。〔Macanio Sakay カティブナン党員の革命指導者。一九〇二年アギナルドの米軍への降伏以後も、タガログ列島政府を自ら樹立して、米軍とたたかいつづけた。〕フィリピン人英雄の伝説も教えられはしたが、民族主義の残した教訓はごまかされてしまった。スペインは悪者でアメリカが救済者だった。今日でもフィリピン史の多くの書物は、水責めや平定村のような米占領軍の犯した残虐行為をとりつくり書かないでいる。真にフィリピン的な教育をアメリカの導入した新しい枠組内で工夫することは確かに不可能だった。フィリピン人の魂の奥底から湧き出るものを汲みとることは、必然的に支配権力の利益とは一致すべくもない明確な民族存在感^{アイデンティティ}に到達したであろうから。

それだけでなくも三世紀にわたるスペイン圧制下にいん滅されてきたフィリピン人の過去は、アメリカ植民地支配の下で蘇生を許されなかった。いやむしろ逆に、わが祖先たちはこの海辺に流れつき定住した奇妙な異民族であり、現在のわれわれともかすかなつながりしかもたないというふうに歴史は扱かうのである。〔スペインがフィリピン諸島を征服した一六世紀中葉以前のこの社会の状態は未知の部分が多い。〕われわれは自分たちが外国に観光に来た旅行者であるかのような感覚で祖先のことを読むのである。(以上すべて原文のママ)

——R. コンスタンティーノ (鶴見良行監訳) 『フィリピン・ナショナルリズム論』(上) 井村文化事業社刊、勁草書房発売、1977。

- 39) 小森陽一『ポストコロニアル』岩波書店、2001。
- 40) 注33) 参照。
- 41) A. Pennycook : *The Cultural Politics of English as an International Language*, Longman, 1994.
- 42) 「エスペラント」を扱った教科書が一つある。*New Atlas II* (三友社出版) である。エスペラントを扱いながら、「英語をとおして世界の人々と結びあおう。」(*New World*, 同社) と一方で述べるなど言語観は一貫していない。「エスペラント」に軸足を置くのなら、英語国際語論は出てこな

いはずであり、英語国際語論に軸足を置くのなら「エスペラント」は、単なる知識（悪しき教養）のためのものということになる。

- 43) テーマは多岐にわたる。「エネルギーの危機」、「車社会」、「ゴミ問題」、「水質汚染」、「チェルノブイリ」、「温暖化現象」、「太陽光」、「リサイクル」、「熱帯雨林」、「食糧問題」、「自然との共生」、「アレルギー」、「ファースト・フード」、「酸性雨」、「飢饉」等々である。
- 44) *American Topics*, (Second Edition) by Robert C. Lugton, Prentice Hall, 1978.
- 45) ①「はるさめ、さみだれ、しぐれ、……いろいろ雨が 있습니다ね。近ごろは酸性雨という言葉も耳にしますが、……」（‘Acid Rain’ - *Access to English II* [New Edition] 開拓社）。「～という言葉も耳にします」とは言いえて妙である。「酸性雨」がいかに記号化しているかよく分かる。「酸性雨」は単なるコトバなのである。「教養主義」にこり固まった英語エリート産物の産物としかいいようがない。
- ②「温室効果」を扱った *Spiral I* (一橋出版) は、その原因を、「二酸化炭素」(carbon dioxide) とフロンガス (chlorofluorocarbon) の増大に求めている。科学的に見ればその通りだが、社会・経済的側面がまったく欠落している。これでは、M.ホルボローの言う「言説の実践」(discursive practice - M. Holborow: *The Politics of English*) にとどまる。ただし、オゾンホール拡大が日本にも影響を与え、Large areas of Tokyo will be under water. と記述し、自分たちの問題でもあることを知らせようとしているのは評価できる。
- 46) A. Pennycook: *English and the Discourses of Colonialism*, Routledge, 1998.
- 47) 例えば、The people shall not be prevented from enjoying any of the fundamental human right. (国民は、すべての基本的人権の享有を妨げられない〔第十一条〕)
- 48) 小森陽一『ポストコロニアル』岩波書店、2001。小森は、戦後民主主義を「日米談合象徴天皇制民主主義」と規定する (p. 91)。
- 49) M. Holborow: *The Politics of English*.
- 50) T. Crowley: *The Politics of Discourse*, Macmillan, 1989. クローリーは、標準英語について次のように言う——, ‘If I were asked among what class the ‘best’ English is most consistently heard at its best, I think, on the whole, I should say among officers of the British Regular Army. The utterance of these men is at once clear-cut and precise, yet free from affectation; at once downright and manly, yet in the highest degree refined and urbane. (p. 204). イギリス英語の標準語には、女性の使う英語は含まれなかったのである。
- 51) I. Illich: “Taught Mother Language and Vernacular Tongue” in D. P. Pattanayak (editor): *Multilingualism and Mother-Tongue Education*, Oxford University Press, 1981.

[資料]

(1)

(a) English is also spoken by many people in Kenya. Do you know why?

Kenya was once governed by Great Britain. In those days English was spoken as an official language.

Kenya became independent in 1964. Now Swahili is an official language. But English is still popular in Kenya. So some people speak three languages: their mother tongue, Swahili and English.

(b) Kenya was governed by Great Britain, but now it is an independent country.

At one time many young people went to England to study at English universities. But now there is a university in Nairobi. Nairobi is the capital of Kenya. Many young Kenyans now study at their own university.

(2)

「世界の言語」地図 (pp.11-10) 掲載

(3)

As a Japanese you probably take it for granted that you speak Japanese, and it goes without saying that Japanese is an important part of your identity. But how about English? Is it part of your identity? In Japan, English is studied as a foreign language. However, it is likely that most Japanese feel that although English is very important, it is not essential. They can live their lives quite well without it. For other countries, especially those which are former colonies of Britain or the United States, English has come to play a major role in the lives of the people. It has even come to be bound up with their sense of national identity. The Philippines is one such country.

Nobody questions that Japanese is the national language of Japan, but what should be the national language of the Philippines? The answer to this question is hotly debated among the native speakers of each of the Philippines' eight major language groups. Pilipino, a language that is almost identical with Tagalog, was designated the national language in 1959. As Pilipino clearly favors native speakers of Tagalog, some suggested that English would make a good alternative as the national language. English does not favor any one of the eight major native languages.

In the end English was not chosen as the national language, but it is still an official language of the Philippines. As such, it plays an important part in government, business and educational circles. Nevertheless, many Filipinos are questioning the value of English. Rather than being useful,

could English be holding the Philippines back?

In an essay published in a Manila newspaper, a Filipino writer told about the problems she had during a recent trip to Japan. Every time she went into a restaurant and tried to order chicken, she failed. Since she spoke no Japanese, she tried waving her arms in the air like a chicken, and even making noises like a chicken, but nobody understood her.

"The Japanese," she complained, "may be very successful in the language of the future — computers — but they are far behind in the language of business, international relations and of the plain people of the world today."

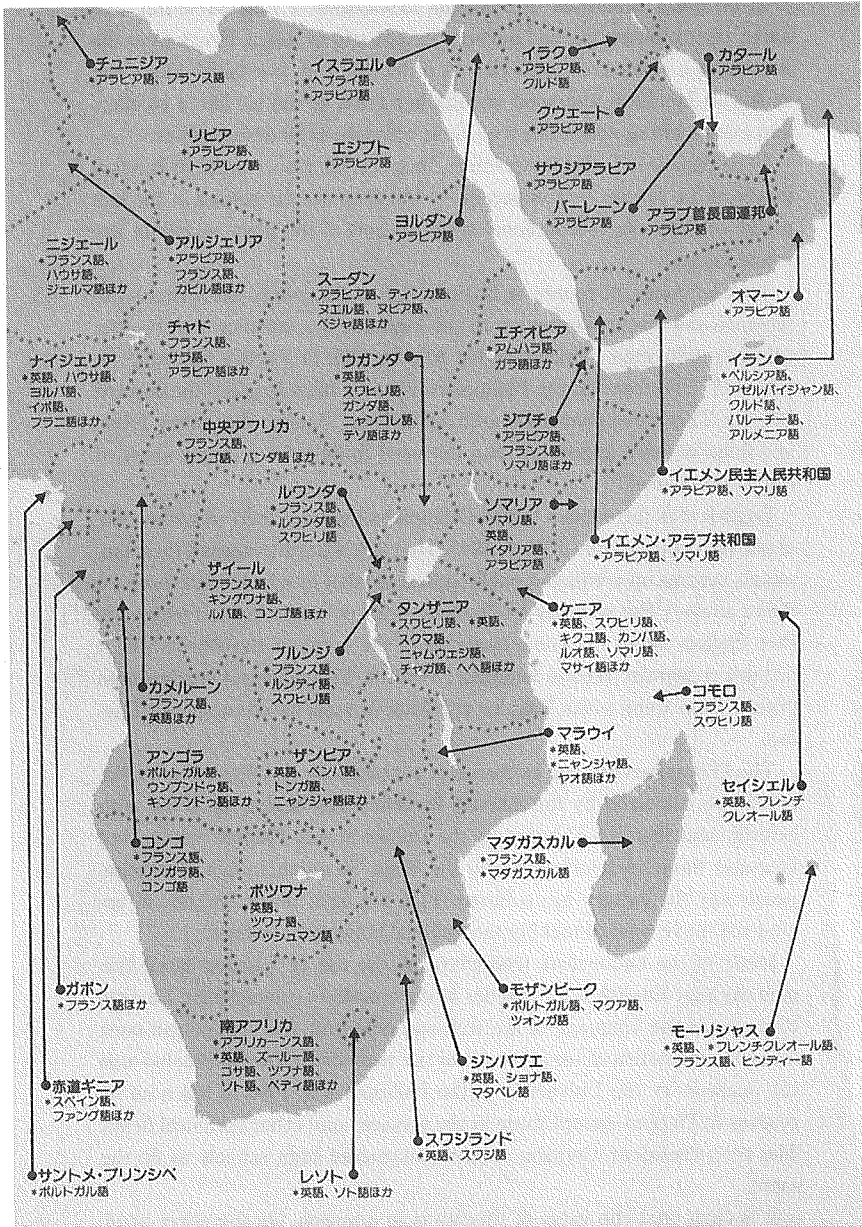
That language, of course, is English. But at the root of the writer's impatience and disappointment with the Japanese is a question that is often asked by educated Filipinos : what has our skill in English helped us to achieve? The trend in the Philippines is away from English and toward Pilipino. This trend shows a search for national identity that many Filipinos think is more important than the need to fight for a larger share of the world market.

English was introduced to the Philippines by the Americans, who colonized the country from 1899 to 1946. They tried hard to spread their language, setting up a national public school system in which English was a major subject. But so many students dropped out early in their education that English never became a language of the home or the street. Still, it became a popular second language. When a Visayan-speaking business person from Cebu visits Tagalog-speaking Manila, he often speaks English.

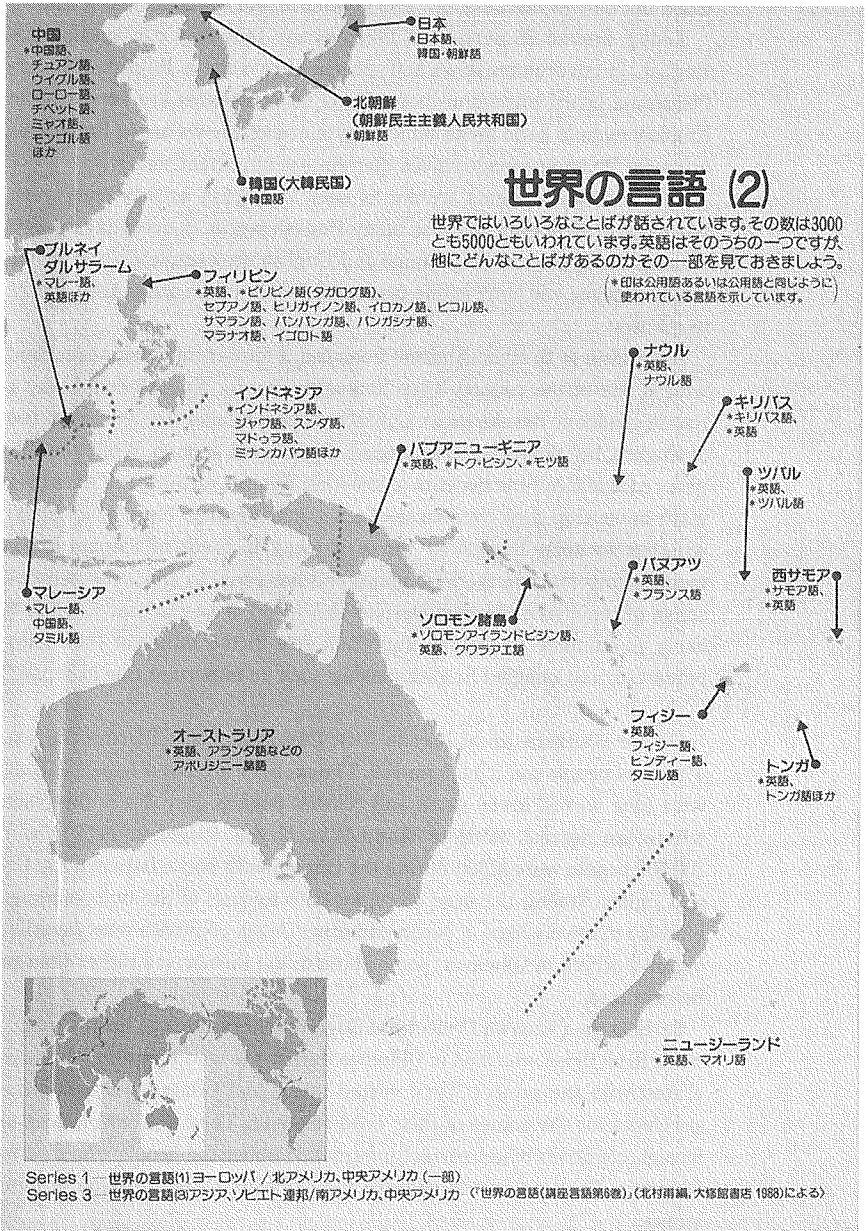
The Philippines has had centuries of contact with the West. The Philippines was colonized by the Spanish for 350 years beginning in the 16th century and then for 47 years by the United States. Filipino culture and language have been influenced by the West. So much, in fact, that some people say the culture has suffered. This has been the major reason behind the move toward making the national language stronger.

Many of the nationalists who advocate the use of Tagalog-based Pilipino say that English is a reminder of the country's colonial past. English, they say, is the language of the rich and powerful, just as Spanish once was. One indication of the strength of the movement toward Pilipino was the decision by the University of the Philippines in 1990 to teach all its courses in Pilipino, except those in the sciences and other technical fields. The then-President, Corazon Aquino, instructed high schools to do the same.

It is clear that the value of English is in question. On the other hand, there are many Filipinos who still believe that English is important for



出典 : New Crown English Series (new editon)



世界の言語 (2)

世界ではいろいろなことばが話されています。その数は3000とも5000ともいわれています。英語はそのうちの一つですが、他にどんなことばがあるのかその一部を見ておきましょう。

(※印は公用語あるいは公用語と同じように使われている言語を示しています。)

Series 1 世界の言語(1)ヨーロッパ/北アメリカ、中央アメリカ(一部)

Series 3 世界の言語(3)アジア、ソビエト連邦/南アメリカ、中央アメリカ (『世界の言語(調査言語第6巻)』(北村甫編、大修館書店 1988)による)

them. They believe that English can give the Philippines a competitive edge, not only in business, but also in science and the academic world.

Today, around 65 percent of Filipinos say that they can speak some English. In government, laws and speeches are made in English, although Pilipino is heard more and more. Signs on businesses are almost all in English, even in rural areas. American television shows are in English, as are most Philippine-made shows that discuss important topics.

Teachers say students are not as good at English as they once were, but even the less-educated use many English words in everyday speech. Among the upper classes, Pilipino and English are completely mixed. Often a sentence will start in one language, switch to the other, then return to the first.

According to Brother Andrew Gonzalez, a former university president who is one of the country's top language experts, English could play a role in economic development. Gonzalez does not favor dropping the use of English, but points out that English alone is not enough. While the Filipinos cannot deny the benefits of knowing English, at the same time they want to develop their own sense of a national identity. The conflict about whether to keep English or throw it away in favor of Pilipino is extremely important in the Philippines and has come to affect the people's sense of their own identity. Despite this trend, it seems that English is likely to continue to play an important role in the future of the Philippines. Can you imagine English playing such an important role in Japan?

(4)

On the southern tip of Itoman City, Okinawa, is a hill facing the sea. The local people call it Mabuni Hill. The scenery around it is peace itself, with blue waves, green grass and colorful flowers. But this is the place where the fiercest battle of World War II was fought in 1945. About 200,000 people were killed during the three-month battle between the US and Japan. Among the dead were not only soldiers of the two countries but also many civilians of Japan and other Asian countries who were living or working in Okinawa: some chose to kill themselves rather than to be captured.

In 1993 the Okinawa Prefectural Government decided to build a monument to all those who died in Okinawa during the war. Many people cooperated with the project. They visited towns and villages and asked the survivors for the names of their dead relatives. They also sent letters to foreign countries to get correct information about the people who died in Okinawa. They wanted to engrave the names of all the dead on granite stones.

On April 1, 1995, at a memorial service in a church in Okinawa they be-

gan reading the names of all the dead : 3,000 names a day. It was June 23 when the last name on the list was read.

On June 23 many soldiers and their wives from both the US and Japan came to that hill in Itoman City. Many people in Okinawa also gathered there. They came to find the names of their war comrades, friends and relatives, and to console the spirits of the dead. On the former battlefield 1,184 large granite plates are standing with 234,183 names inscribed. At a distance, they look like waves.

One journalist asked a US veteran, "How do you feel now after fifty years?" Touching a name on the stone he said in tears, "I don't feel good at all. This was my best friend."

A former US marine said, "We lost lots of good men on both sides. That war particularly shows how really stupid man can be."

An old Japanese woman said, "I hope my son can now really rest in peace."